

4章 分析編—土佐の地名を探る—

本章では、「土佐の地名を探る」と題して「川」「山」「焼畑」「災害」の地名を分析する。

1、四万十川語源考

(1) 大川という川名

『土佐州郡志』の上山上村の本村（田野々村）の項に四至として『東限瀬里村西限大川南限家之市北限後山・・津野山川在西新井田川在南過合流』とある。ただ、多くの村の四至は「大川」とだけ書かれている。

地名とは「二人以上の人の間に共同で使用せらるる符号」と柳田国男氏が示すように、地元では「大川」で十分用が足り、城下の役人には総称した呼び名も必要であったろう。

為政者が付した名称は時代に淘汰されるにしても、古より呼ばれてきた音としての地名は、いくらかの転訛はあったにしても地名に刻まれた歴史を語ることとなる。

その地名に耳を傾けると悠久とした歴史を感じることができるし、それぞれの説に資史料をあてて推理することは学ぶことの楽しみでもある。ただし、川名の命名動機は機械的に地域名を、大河となれば上流域の地名を冠するのが一般的であることから、地名としての川名はあまり面白くもない。流域の河川名称は生活において必要でなく、郷村としての名称で事足りたといえる。小谷や川の合流点では別である。小谷や合流する小谷は固有な名称で呼ばないと意思疎通ができないことから川名を付されることになる。生活者にとって身近な川は「川」であり、利用する「川原」であって、合流する大きい川は「大川」と区別していたと思える。

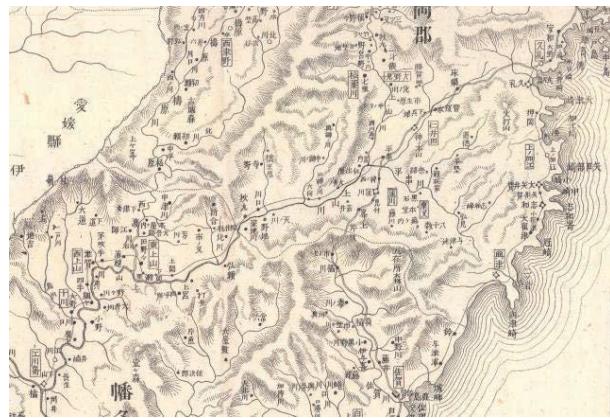
「大川」の名称については、橋田庫欣氏が『土佐史談』¹⁾ 誌上に地検帳と土佐州郡志の分布図を示し詳しく書かれているので是非読んでいただきたい。千葉徳爾氏の『新・地名の研究』(21頁)に地名がモノではない暮らしの道具であることがよく理解できる記述がある。

山間の非農耕地帯にあっては、地名の命名法は異なった基準に立って行われる。特定の道しるべとなる地点以外は河川の名称が主であって、それによってその流域までも代表させている」と述べアイヌの事例を踏まえ「ことに山頂に名がついていなくても、河川渓流にはほとんど名がついている。それらが通路や生産地として利用されていたことを推察できる。

地名はコミュニケーションの道具である。活動の範囲において相互に認知しあえる地名が大事である。日常に必要な河川渓流については固有の地名が必要であるが誰もが認知できる「大川」は一般地名で事足りたのである。確かに子どもの頃、山に遊びに行くときは「こやんたね（小屋ノ谷）へいってくるけん」といって山遊びに行ったものだった。

(2) カワの語源

川の語源は「河水流ルル音カ、がはがは」と『大言海』は述べている。ゴウゴウ音を立てて流れるから、その音の擬音語だという。カワを意味する漢字に「川」「河」「江」の三つがある。象形文字の「川」は見てのとおり水が流れる形を表している。「河」は黄河のことである。「江」は声符で工（こう）。工にはゆるやかにまがる意があり、長江（揚子江）の江である。川と海の際を「河口」といい、その部分を「入り江」という。二つの川の合流点は「川口」という。イメージ的には大河ドラマと呼ぶことから「川」より「河」



1895年・高知県管内全圖 (四萬十町分)

¹⁾ 橋田庫欣 1996 「四万十川—その名称と変遷（上・中・下）」『土佐史談』 199-201号

が大きい。「江」は源流から河口までの流域というより海に面した河口部分のよう感じます。

『民俗地名語彙辞典』では川について「井戸のことをカワというのは、沖縄、九州、中国、四国の愛媛県あたりまで」という。九州では「川」はナガレガワ、沖縄ではカーラ。「井戸」と「川」とは、日常生活のうえでも、語形のうえでも区別されなかつた時代（もしくは地域）があつたのではないか」と述べています。暮らしに近い水の利用は自然流水の「井戸」であり、沖の

「大川」は水運や漁獲、ものを広げ干す「川原」など生産利用としての性格を持つてゐるのではないか。

『地名用語源辞典』も川について「古い時代とかある地方の日本人にとって水のある所がすなわちカハであり半であつたはず。水そのものが重要なのであって、河流を源流から河口部まで一本の流れとして認識する必要はなかつた。」と説明しているがそのとおりである。千曲川が信濃川と途中で変わるのは何ら不思議でもない。「小諸なる古城のほとり・・」は千曲川でなくては絵にならないのだ。

『日本全河川ルーツ大辞典』によると全国共通にカワの名称は△△川と接尾語に川を付してゐる。ただし、アイヌ語では大きい川を「ペッ」、小さい谷川を「ナイ」というが川を意味するナイに接尾語として川を重ねて付けて川名とする場合がある。

高知県でも穴内川（香美市）、奥屋内川（四万十市）がある。アイヌ語地名に関係する地名と述べる人もいる。高知県の川名で「河」の付く川は、面河川だけである。「面河」の語源は「日の正面オモゴ山によるか」と『河川ルーツ辞典』で徳弘勝氏は書いてゐるが不明である。大物川が四万十市の中筋川の上流域にあり秋田県に雄物川（おものがわ）がある。石材や木材の大きいものを大物（ダイモツ）ということから木材と関係する地名ではなかろうか。そう考えると、面河も大一級の木材生産地だから「オオモノガワ」と讀んでしまう。面白いのは川をゴーと読む河川が安田川（安田町）の支流に「東川（ひがしごー）」、伊尾木川（安芸市）の支流に「小川川（おごうがわ）」がある。

（3）集落名と接尾語「川」の合成による川名

河川の名称は流域の上流部の地域名称に「川」の接尾語を加えて命名することが一般的である。ここでの問題になるのが中津川などの地域名称の末尾に川が付く場合である。四万十町内には大字だけで若井川、神ノ川、天ノ川、家地川、小野川、窪川中津川、東北ノ川、魚ノ川、藤ノ川、向川、飯ノ川、希ノ川（四手ノ川）、打井川、大正北ノ川、芳川、西ノ川、大正中津川、里川、野々川、大井川、久保川、十川、戸川と23か所もある。

河川の正式名称はその河川を管理する国や県、市区町村が告示を行うことにより公称河川名となることから『高知県河川調書』等²⁾を調べてみると例外がいくつかあることに気づく。

▼地域名称が河川名称 河川名称（地区名・集落名）

神ノ川（口、中、奥神ノ川）、家地川（家地川）、北の川（東北ノ川）、飯ノ川（飯ノ川）、つづら川（大正・つづら川集落）、打井川（口、中、奥打井川）、北ノ川（昭和・北ノ川集落）、中津川（大正中津川）、大井川（大井川）、久保川（久保川）、白井川（十川・白井川集落）

▼地域名称に「の」と「川」 津賀の川（津賀）、戸川ノ川（戸川）

このような合成地名の混乱は川名だけでなく自治体名称にも表れる。四万十市の旧名称の中村市。土佐



四万十川と予土線列車（四万十町）

²⁾ 「渡川水系河川整備計画・平成27年2月（国土交通省四国地方整備局/高知県）」と「高知県河川調書（平成13年3月31日現在）」による河川名称

一条氏の城下町として歴史を刻んだ中村は明治の合併で中村、右山村等が合併し、中村（中が地域名称で村は市町村制の区分）が発足し明治31年に町制施行したおりに中村から中村町に名称変更した。地名である「中」と自治体区分名称である「村」が一つの固有化され、それに町制の区分名称が加えられたことになる。松葉川の中村も郷村名がそのまま大字となったものである。地名2文字化の習慣から一文字を避けた結果だろうか。

(4) 橋名板

川名を示す表示板は主要国道が大河川を横断する橋梁の脇に設置するくらいであまり見かけない。河川の名称を確認するのに一番手っ取り早いのが橋梁に付けられた「橋名板」である。橋梁の名称などを示すために設置される銘板をいうが、橋歴板（事業主体・橋の構造・材質・設計施工会社など）も設置する自治体もあるという。半永久的に伝えることのできる橋名板だからこそ公称としての河川名称を付すだろうし地物としての橋梁名も納得性・認知性のあるものにしなければならない。



四万十川に架かる大正橋（四万十町大正）

2016年、四万十町大正大奈路にできた橋の橋名板で見ると、道路起点側の左側に「漢字表記の橋名（大木絆第二橋）」右側に「交差する河川などの地物名（梼原川）」、道路終点側の左側に「ひらがな表記の橋名（おおききずなだいにきょう）」右側に「竣工年月（平成26年5月）」と、『高知県建設工事仕様書第6編道路編』の4-8-10橋名板の項に基づき書いてある。このことから、国道439号線の起点が徳島方面（梼原川上流域）であること、2号橋が先に完成したことが推測できるが「大木絆」は意味不明。管理者に照会すると「地元が、大奈路と木屋ヶ内の頭字に絆を加えて命名した」とのこと。橋の名前の付け方には苦労があるだろうが、「大奈路のかみの橋」と名無しの権兵衛橋とならないよう、親が子供の名前を決めるときの愛情をもって名付けていただきたいものである。

百年単位で記憶される橋については、橋の命名、記録する橋構造等の内容、親柱・高欄のデザインなど請負契約額の1%程度は必要経費としてしっかり充てて架橋していただきたいものだ。北幡の赤鉄橋といわれる大正橋（大正3年架橋・文化的景観の重要構成要素、国登録有形文化財）は、現在通れない橋となって「行き場のない橋」となっている。この橋の親柱は今も堂々とした佇まいを主張している。

(5) 瀬と渕

大人の川漁、子どもの川遊び。暮らしに生きる地名は、河川名称より、谷川。それよりもっと小さい「瀬」と「渕」だろう。

川に関わる暮らしを調査した一冊の報告書が役場のカウンターにあった。四万十町の委託を受けた西日本科学技術研究所が四万十町の窪川中津川・米奥・壱斗俵・市生原などの各地で現地踏査ヒアリングを踏まえての業務報告書「平成27年（2015）四万十川保全活用推進検討業務報告書」である。ここには瀬や渕の名称が写真とともにキャプションも付してある。また、四万十川流域の瀬や渕の全記録をまとめているのが、四万十川財団と写真集「記憶の町」で有名な武吉孝夫さんである。近く企画展示会を開催するということで楽しみである。

ダムに沈んだ下津井の瀬や渕も聞き取り調査で一定の記録はとどめているが、使わなければ忘れ去られる地名でもある。どこに鮎がいてウナギがとれたかは「オキノマエ」「ミヤノセ」「ガデンバエ」「フクバイ」とか符丁のような会話をしたものだ。15年くらい前に旧大正町の全調査は実施したが写真と瀬の名前で一部欠落した地域もあったのでその資料を基に現地を再調査したい。

(6) 川名の80%は水源地の地名

地域名称をあてた川名以外の川を探してみた。

井細川 四万十町折合の国有林野（大郷山、根木尾山、源見山ほか）を水源とし南川口で四万十川に合流する。イサゴは砂のこと。イサも砂地や暗礁を表す語。高知の方言でイサリは鮎の火振漁をするときに用いる焚く松を入れる鉄製の道具（網籠）であるので、その短縮形か。『四国樹木名方言集』では青桐のことを高知県西部では「イサキ」という。その樹木名イサキが転訛してイサイになったのか。「イサイ」は『長宗我部地検帳』のホノギにもでてくる中世からの地名である。

【四万十町の字一覧】イサイ川（仁井田）、井才越（大井川）、イサナブチ（希ノ川）

【高知県の字一覧】イサイ谷（宿毛市小筑紫）、イサイ沖（土佐清水市下益野）

足川 四万十町下津井と樺原町の境となる川で国有林野（足川山 4032 林班、足川続山 4033・4034 林班）

となる。地形図では足川川とある。

「アシ」は交通困難な谷の意や墓場、足、葦の意味もある。足谷・芦谷は悪谷で人の入らぬ谷。荒れ地。

【四万十町の字一覧】小芦川山（仕出原）、足川（中神ノ川・中神ノ川）、アシ川（南川口）、足川（江師）、足川山（下道・下津井・浦越）ほか

【高知県の字一覧】芦川（佐川町川ノ内組）、アシカワグチ（四万十市古尾）、奥足川山（宿毛市小筑紫）

後川 興津に流れる二級河川。後は表の反対で、裏、背後にあたる方向であることから、小室の浜の裏側を側流することから名づけられたか。高知県内には物部川（香美市）の河口近くの後川、中村市街地を四万十川と挟んで流れる後川がある。

【四万十町の字一覧】後口川（日野地）

払川 伊勢神宮の御手洗場となる川が五十鈴川のように、宮内の五社さんに流れる川が払川。「祓え給い、清め給え」のハライカワか。窪川には「神ノ川」「みこの川」もある。

【四万十町の字一覧】拂川山（中神ノ川・折合）、拂川（下道/ホノギ・ハライ川）、原井川（十川）

【高知県の字一覧】拂川（いの町）、秋川（宿毛市小筑紫）、拂川（宿毛市平田町戸内）

大井川 四万十町に大井川は二つある。一つは道徳の火打ヶ森を源流として東又川に合流する大井川。二つは十和地域の大井川を流れる大井川。

静岡県の大井川の「箱根八里は馬でも越すが越すに越されぬ大井川」は有名な馬子歌。箱根以上の往来難所の大井川であるが、渡し船を設けなかったのは川越人足の雇用を守る幕府の雇用政策であったという。日本地名語源辞典では「オホヰ（大堰）の意で、大きな井堰のあった所」とある。ヰ（ヰ）は井堰とともに水路や川の意味があるので、大井は大きな川とも読める。

大井川地区は十和地域では比較的水田の広がる地域であるが灌漑用水に事欠くところでため池は3か所にあるが規模は小さく大部分は四万十川からの揚水利用という。東又の大井川も同じで、大堰があるわけでもなく大きな川でもないのに「大井川」とは命名動機が分からぬ。

(7) 川の暮らし

次に川の暮らしについて地名から見ていく。

船戸 桂井和雄氏が『おらんぐの話』で「クナド（岐）の神を祀ったことに由来。この故に船には全く関係もなさそうな山間にこの地名が残る。岐の神はフナトともいい、土佐の山間の旧道に多い石神、柴神、柴折さまなどと呼んで柴を手向ける道路神と一連のものと」と説明し、高知県下の船戸地名はかつて行路の安全を守る道の神、岐神（フナト）が祀られていたという。道祖神と同じように村の外から災厄が入るのを防ぎ、村を出る人の安全を守る神の名を地名に刻んだのだろう。新莊川（須崎市）を上り詰め「辞職峠」を越えたら旧東津野村（津野町）の船戸となる。ただ、四万十町の「船戸」地名は全国に分布する「フ

ナト=渡し場」と同じように全て川渡しの所をさしているように思える。確かに川渡しは大川を挟んで隣の村を結ぶ場所であり、境界の神、道中安全を守る神を祀ることは当然であったことだろう。川渡しの場所には必ず見渡し地蔵が安置されている。『窪川町史』『大正町史』『十和村史』に記録されている見渡し地蔵は、根元原、七里・越行集落～作屋・西ノ川集落、大正・轟崎集落、江師～小石、大正大奈路・赤岩集落、下道などにある。

【四万十町の字一覧】船戸（西原・若井・大井野・大向・昭和・十川）、船戸場（大向）、船戸ヶ内（与津地）、下船戸（上宮）、船戸山（弘瀬）、船渡ノ越（大正北ノ川）、上ミフナト（江師）、船戸ノ越（西ノ川）、船渡ノ上（昭和）

【高知県の大字一覧】船戸（室戸市佐喜浜・室戸市元・室戸市吉良川町・大豊町西豊永・大川村・仁淀川町名野川・土佐市北原・津野町）

弘瀬・広瀬 『地検帳』にある中世からの地名。弘瀬は四万十町大正地域に、広瀬は同町十和地域にあるが地形の形状は同じである。弘瀬・広瀬について「主として山村の川沿いにある地名の一つで比較的広い田畠が開け日ざし明るい集落のたたずまいがある」と『桂井和雄土佐民俗選集』³⁾は書いてある。広瀬は縄文前期の広瀬遺跡も発掘された地域であり、川漁の場として最適であったことから広い瀬に因んでつけられた地名と思える。

【四万十町の字一覧】広瀬駄場（作屋）、広瀬ノ上（上秋丸）、広瀬ガマ（大井川）

【高知県の字一覧】ヒロセ（いの町小野）、弘瀬（いの町勝賀瀬）、弘瀬（いの町上八川上分）、弘瀬（宿毛市沖ノ島）

今成 四万十町十和川口の今成集落。「今」の字は「新」の意味で開発地名の一つだろう。桂井和雄氏は越知町の今成と四万十市の今成と三つの地形の共通点として大きな屈曲のもとに展開している新しい地名と説明している。高知県内の字名としてはないので中世以降の村単位の開発による村名であろう。

轟 トドロはオノマトペの「ドウドウ」だろう。ドド（百々）は「十」かける「十」で百を表したもので地名二字化から「百々」のなったもの。旧中村市（四万十市）や旧春野町（高知市）の百笑（ドウメキ）や成川・鳴川など全国に分布する川の水音からきた地形地名だろう。四万十町では大正の瀬里轟や昭和の轟など轟地名が多い。

【四万十町の字一覧】轟川（見付）、轟崎（東川角）、轟山（宮内）、トドロガ谷（寺野）、轟頭（野地）、コトドロ（家地川）、轟ヶ市（窪川中津川）、轟（床鍋・志和）、轟ヶ谷（与津地）、轟崎（大正）、轟山（瀬里）、轟ノサコ（相去）、轟瀬ノ岡（浦越）、トドロホキ（昭和）

【高知県の字一覧】轟（宿毛市大島）、轟山（宿毛市二ノ宮）、トドロ（宿毛市小筑紫）

渡り上り 山中の谷川でワタリ（自動詞）とあるのは渡渉して人馬が横切ることのできる場所の地名となる。船で向こう岸へ渡るのはワタシ（他動詞）となる。『地検帳』のホノギ（地名）にもある中世からの地名。小河川の渡渉地点は生活に必要な地名として各地に刻まれている。中国地方では山を葬所の場所としていたことから「渡りの山」と呼んだという。ワタリは渡りで「入らずの森」や「地獄谷」と同じように他界を示す名といわれる。

【四万十町の字一覧】渡り上り（根元原・西川角・宮内・仕出原・打井川）、竹ノ渡（希ノ川）、佐渡り（大正中津川）、ワタリガ谷（久保川）、渡り道（大道）

【四万十町のホノギ】渡アカリ（若井・高野・若井川・見付・宮内・仕出原・大向・桧生原・寺野・南川口・家地川・中村・市生原・黒石・志和）、フカセノ渡（神ノ西）、川渡瀬ノモト（勝賀野）

【高知県の字一覧】渡瀬（いの町清水下分）、渡り上り（土佐市新居・土佐市宇佐町井尻）、弘渡り（四

³⁾ 桂井和雄 1979『桂井和雄土佐民俗選集（1・2・3）』高知新聞社。2巻「土佐地名覚え書き」に記載されている。

萬十市西土佐藪ヶ市)、渡り上り(宿毛市和田・宿毛市平田町黒川)、渡場(宿毛市和田)、塩田渡り上り(宿毛市宿毛)、馬渡り(宿毛市二ノ宮・宿毛市平田町中山・宿毛市平田町戸内)、櫻ノ木瀬渡り上り(宿毛市平田町戸内)

コミ コミについて桂井和雄氏は「古味、小味と書いてコミと訓ませる地名は、山間部の川沿いに多い。水流のよく突き出た屈曲部の称で、水流の入り込む意味のコムという動詞の名詞化であろう(桂井和雄『土佐民俗選集②』 p 275)」と説明する。五味(ゴミ)地名は粒子の細かい砂などが堆積した地名。五味地名に住む場合は、河岸に家を建てないという災害地名でもある。土佐では溝や池にある泥土。ゴにアクセントがあり、ゴミ(塵芥)と区別する(『土佐方言辞典』)。

【四十町の字一覧】コミ山(峰ノ上)、五味ノ平(日野地)、コミタ(鳥手)、上ハコミノ(大正大奈路)、小味野々山(大正大奈路)、古味原(下道)、下モコミ(古城)、五味(地吉)、ゴミダ(井崎)

【高知県の字一覧】コミ(香美市土佐山田町角茂谷・大豊町久寿軒・大豊町岩原)、古味(大豊町和田)、上ミコミ(香美市香北町西川・いの町上八川上分)、セリコミ(香美市香北町岩改・香美市香北町五百蔵・香美市物部町仙頭・香美市物部町山崎・香美市物部町久保沼井)、植込(南国市白木谷)、コミ山(佐川町川ノ内組・佐川町四ツ白)、古味谷(佐川町黒原)、込山(佐川町加茂・日高村沖名)

柳瀬 川に梁を仕掛けて魚を取る丁度いいところが「ヤナセ」。長い瀬「八咫瀬(やたせ)」の説もあると高知新聞連載コラム「土佐地名往来」で馬路村魚梁瀬を紹介。

【四十町の字一覧】柳瀬(西原)、柳瀬田(根々崎)、柳瀬ノ瀬(西川角)、梁瀬(天ノ川)、柳瀬山(数神)、柳瀬(大正大奈路)、梁瀬(十和川口)※七里の集落に柳瀬(やなせ)、井崎の集落に柳瀬(やなぎせ)がある。

【高知県の字一覧】西柳瀬乙(東洋町野根)、柳瀬(香美市物部町久保安野尾)、物部町柳瀬※大字(香美市)、柳瀬(南国市十市)、柳瀬本村※大字(いの町)、柳瀬屋敷(佐川町丙)、柳瀬(四十町勝間)、柳瀬(宿毛市橋上町奥奈路・宿毛市橋上町神有)、柳瀬(大月町添ノ川)

(8) 古地図・古文書に見る四十町の記録—四十町分を中心に—

▼長宗我部地検帳(1589年・天正17年)

太閤検地の前に長宗我部元親が土佐一国を検地した記録。仁井田郷地検帳、上山郷地検帳とともに「大河」、「大川」の記述で、下流域の中村郷地検帳の不破村、中村の築地口、蕨谷になって初めて「渡川道ノ南」、「渡川下出来」などのホノギ若しくは川名とみうけられる記載がある。ただし、渡川の記述は隣接村にもない。地検帳の特性からいたし方ないのかかもしれない。

▼元親記(1631年・寛永8年/高島孫右衛門)

元親の家臣で長岡郡江村郷に領地がある高島氏が元親の三十三回忌に著したもの。「幡多渡川合戦の事渡り川より西、渡り川の向、渡り川にて」とあり、いずれも渡り川と記している。

▼四国遍路道指南(1687年・貞享4年/真稔/刊本・講談社学術文庫)

四国遍路を十数回巡った真稔は、遍路の利便のために『四国遍路道指南』を刊行した。初めて出版された遍路案内記は、遍路の定着・普及に貢献したという。札所の本尊の解説はもとより、札所から札所への道案内を札番の経路ごとに村名、峠、坂、浜辺、川、橋、舟渡し、舟賃、道の曲り、荷物置き場、堂屋、茶屋、名称など詳しく記している。遍路ガイドブックであることから、地名については丹念に聞き取り、現地での呼び名を記録している。

真稔は三十六番青龍寺から三十七番五社までの経路に「かわみ村、標石あり。この間に少し山越、後ろは川、引舟がある。これはねねさき村善六が遍路のためにつくり置いたもの。過ぎて大河。洪水の時は手前の山に札納めどころがある、水がない時は五社へ詣る」。また、三十七番五社から三十八番金剛福寺までの経路に「○いでくち村、この間に小川、坂あり。○たかしま村、大河、舟渡し、さね崎村天満」という所

引船あり。○ま崎村、薬師堂あり。つくらふち村、この間いつた坂」。中村（四万十市）でも「たかしま村大河舟わたし」といぢれも簡潔に「大河」とだけ書き、四万十川とは記述されていない。

かくも詳細に地名採取した『四国遍路道指南』に四万十川を大河とだけ表現しているのは不思議である。私見ではあるが、真稔の聞き取り調査の結果、地元の人の呼び名が「大河・大川（おおかわ）」であり、その地名が普通名詞でなく、固有名詞として呼んでいたと理解すれば納得もいくものである。上流域の四万十町では、今でも「大川に鮎をとりにいく」という。

真稔は土佐路の川について次のように記録している。

奈半利川→大河、安田川→安田川、伊尾木川→いおき川、安芸川→あき川、物部川→物部川、仁淀川→二淀川、新莊川→すさき川、四万十川→大河（五社）、吹上川→ふきあげ川、蛎瀬川→かきせ川、四万十川→大河、松田川→うしのせ川

▼四国偏礼靈場記（1689年・元禄2年/寂本/刊本・教育社新書）

真稔は『四国遍路道指南』の案内記に満足せず高野山の寂本を訪ねその編集を求めたという。この『四国偏礼靈場記』は、高野山のエリート学僧が書き表しただけあって靈場の由緒は詳述されているが、真稔の遍路道ガイドブックのように道案内や地名の記述は少ない。四万十川に関しては「五社」の記述のなかに「前に大河があつて、仁井田川と呼ぶ。仁井田は庄の名で、当社の別當は岩本寺という。社から十町余り離れた久保川の町にその寺がある。」（同書283頁）とあり、この川を「大河、仁井田川」と呼んでいる。寂本のすぐれた画技による札所の配置の見取図「五社図」にも「仁井田川」とある。

▼土佐物語（1708年・宝永5年/吉田孝世）

四万十川の川名の初出典とされているのが『土佐物語』。『土佐物語』は土佐の戦国大名・長宗我部氏の盛衰とその合戦を記録した戦記物で、文明10（1478）一条殿下向から元和元年（1615）長宗我部氏亡滅に至るおよそ138年間を記録している。原本は存在せず6種類の写本がある。写本によっては「四万十川」に「わたりかわ」とふりがなを付けてあるものもある。

国立国会図書館デジタルコレクション『土佐物語』⁴⁾には「土佐物語卷第九 四万十川（わたりがわ）合戦の事」とある。四万十町における項は、「久禮陣井仁井田五社の事」、「槿花の宮の事」などがあり、当時の地名を知るうえで貴重な資料となる。同書卷第三「久禮陣井仁井田五社の事」では「此仁井田の郷と申すは、東はしへみらすとて、久禮の大山なり。嶮しき坂の間、数十町上つて、上は浩々たる平地なり、床敷・柿の木・濱の川・窪河などといふ村あり里あり、田あり、畠あり、川流れたり。南は、志和・興津などという所へ下る事又數十町 北は大野見半山・津野山に続きたり。西は片坂とて、高岡・幡多の郡堺にて、磐折に下る事も、又數十なり（中略）又五社は、仁井田五人の衆の氏神と申候。西・東・志和・窪川とて、五人の領主、是を五人衆と申すなり。西とは河内の城主西田彦太郎宗勝、東はてんにちの城主福良助兵衛宗澄、志和は志和の城主南波勘介宗茂、西原は西原城主西原摂津守貞清、窪川は窪川の城主山内備後守宣澄、今の五人衆はなり。（後略）」とある。

高知県内の河川で『土佐物語』に記録されているのは、

「石清川（いわし）」 卷第二坂折山合戦附工文遅参の事に記載。国分川（南国市岡豊町八幡）

「贊殿川（によど）」 卷第三大平山城守敗績の事に記載。仁淀川「国中一の大河なり」

「窪津川」 卷第八蹉跎山井加久見が形見の石の事に記載。室津川（室戸）

「はらひら川」 卷第八蹉跎山井加久見が形見の石の事に記載。別頁でははらひ川・見当川

「物部川」（香美郡にある川として「かがみ川」という説あり）：卷第八所々一見の事／物部川

「かがみ川」：卷第八所々一見の事／新莊川（須崎）

⁴⁾ 国立国会図書館デジタルコレクション<<http://dl.ndl.go.jp/>>国史研究会編『土佐物語』

「四萬十川（わたりがは）」：卷第九四萬十川（わたりがは）合戦の事／四萬十川

▼土佐州郡志（1704-1711 宝永年間/緒方宗哲編）

仁井田郷の各村の四至に「大川」とあるが山川の段の記載はみあたらない。窪川郷分や立西地域においては「大川」の記載すらない。

上山郷の上山上村本村（現在の四万十町大正）の四至に「西南限大川・・津野山川在西仁井田川在南過合流」とあり、初めて大川以外の河川名称として「津野山川（樺原川）」、「仁井田川（四萬十川）」とでてくる。「仁井田川」の呼称は今でもたまに使われるし、JR予土線の瀬里轟に架かる鉄橋は「仁井田川橋梁」とある。「津野山川」は高齢者の間で希に使われる。上山本村下分（大正）の山川の項に「津野山川 過村西入大川」、「仁井田川 自東至西合流津野山川」とある。上山郷下分（十和地域）、下山郷（四万十市西土佐）においても「大川」の表記となっている。ただ、大野村（今の十川地区）の四至には「南有大川自高岡流出過村」とあり、大川は高岡から流れてきているとあるが、津野山川の津野山郷なのか仁井田川の仁井田郷なのかは判別できない。

中半村（四万十市西土佐中半）の四至には「・・大川経村中通下田比間九里有舟行運漕之便」と大川を船の便で下れば中半から下田まで35kmである。四万十川下流域の入田村（四万十市入田。赤鉄橋の上流2km右岸）の四至に「東西限渡川南限具同村西限佐田村・・」と「渡川」が初出する。入田の隣、具同村の四至には「東限渡川・・」とあり、山川の項には「渡川 村東」「中筋川 村南」と二つの川を列記している。中村郷（四万十市中村）の記述になって初めて「四萬十川」がでてくる。山川の項に「渡川 在村西宿毛往還路自源津野山出興豫州川合是四万十川之下流過村入下田浦」、「後川 在村東北亦流入下田浦」とある。源流の津野山から豫洲川（広見川）と合流した「四萬十川」の下流を「渡川」と説明している。中村に接する不破村の四至に「四萬十川後川合流處・・」とあり、土佐州郡志に「四萬十川」はこの2カ所だけである。

『土佐州郡志』は宝永年間（1704-1711）緒方宗哲の編纂であるが、各村の四至・山川・寺社・古跡・城址・土産・人物など一定の記述仕様はあっても踏査して記録する人の聞き癖・書き癖があり、記述内容からみて複数人いるように思える。四萬十川の名称論争も少なからず影響しているのではないか。

▼土陽淵岳誌・どようえんがくし（1746年・延享3年/植木拳因・うえききよいん）

3巻399項目による土佐博物誌。「三十一 講多郡四萬十（ワタリ）川ノ河原ニ盆石多シ寸法能叶ヘル石也油石ニテ極テ見古又也近年ハ好事ノ者取ツクシテ念頃ニ求サレハ得難シト云」と四萬十川に「ワタリ」とフリガナを振っている。（同書52頁）

▼土佐國白灣往来（明治維新前後/松野尾章編・まつのおあきづら/皆山集8・9 地理編 p553）

地誌である『土佐國白灣往来』には四萬十川について「四萬十川又渡川水源四万川村下田村ニテ海ニ入ル支川八流あり曰仁井田川・・」とある。

その8支流についてまとめると

- ①仁井田川 船戸ヨリ發シ田野々ニテ本川二入
- ②久保川 大道發シ久保川ニテ入
- ③川口谷川 烏村二發シ川口入
- ④吉野川 一名伊与川伊豫國宇和郡北川村發シ下山ニテ入
- ⑤目黒川 伊豫宇和郡目黒村ニ發シ津ノ川ニテ入
- ⑥奥屋内川 奥屋内二發シロ屋内ニ合入
- ⑦後ロ川 三ツ又發シ井澤ニテ入
- ⑧中筋川 中山ニ發シ坂本ニテ入

樺原川の記述がないことから樺原川を本流としていることとなる。支流は8つあり、船戸から田野々ま

での支流を仁井田川としている。

▼土佐一覧記（1772-1775 天明年間/川村與惣太『土佐国道之記』）

四万十町で詠んだ歌は22首あるが、川名を読んだ歌はない。中村で「四万十川」を詠んだ歌が二首あるだけである。

「中村 いつこそととわすとも知れ前うしろ二つの川の中村の里」

「四万十川 照月のかけも流れて澄み渡り 川瀬涼しき夜半の秋風」

土佐一覧記は「安永の土佐風土記」といわれるよう、東は甲浦から西は宿毛の松尾坂まで、花鳥風月をめで地名・故事を歌で綴つた風土記でもある。



川村與惣太歌碑の拓本（四万十町江師）

『土佐道記』の写本の一つに「四万十川 此川土佐国の大川なり」とあることから、当時も有名な川であったことは確かだ。

『土佐一覧記』に取り上げられた川名は次のとおりである。

押野川（東洋町）、石清水川（国分川/南国市）、笠川（笠ノ川/南国市）、鏡川（高知市）、二淀川（仁淀川/土佐市ほか）、神川（上八川・いの町）、須崎川（須崎市）、鏡川（新莊川/須崎市）、有井川（黒潮町）、四万十川（四万十市ほか）、牛瀬川（松田川/宿毛市）

▼今村楽歌文集（1804年・文化元年/今村楽・いまむらたぬし）

高知市生まれの近世後期の国学者で歌人。「水上より川下まで僅かの小流も残さず数えたりとて四万十川あるべきようやはある。いつの代にか、かかる暇ある人ありて数へたてけんとさへ思ひなされて、あなおかし（340頁）」と支流を数えたら四万十あったという宮崎八野右衛門の説を一笑に付し四万十川と渡川の名称について次のように述べる。ちなみに宮崎八野右衛門の説は「済川（わたりかわ）はその源遠く豫洲より出る。その流れ悠々、四万十川集合して海に入る。因って俗に四万十川という」というものである。

今村楽は「仏説に見えたる三途川を、『四万十川』とかける、その義さだかには知られねど、もし仏經の内に、四万十川を経て三途川に至るなどいふ説はみえざるか。しかば、九十九と書いて『つくも』とよめる謎書の例によりて、『四万十川』もすなはち『わたり川』と詠まるるなり。こは浮きたる考へなれど、それ西方は十万億土と説けるたぐい、仏經の常なれば、必ずしもあるまじきにあらず、その道の人に尋ねべき事になん」と述べる。また、近世文学史が専門の竹村義明氏は「文化二年（1805）、友人に連座して幡多路に追放となった樂にとって渡川とは三途の川であったことだろう」と同書の解説をしている。

▼伊能忠敬測量日誌（1808年・文化5年5月29日/伊能忠敬）

伊能忠敬の測量日誌は刻まれた地名を発見する貴重な史料である。文化5年5月29日（1808.6/22）の日記に「下田浦へ行き同所止宿にて中食し、それより同浦川口向〔四万十川という。当國の大河又渡川といふ。巾二三町〕間崎村枝郷名鹿地ノトウ崎より初め、同村枝郷初崎界より剣山を横切り海に付て山上を測る」とある。江戸末期には四万十川の呼称が主流だったようで渡川は別称として付記している。ただし、測量にあたっては事前に文献資料等も調べているはずで、対外的に正当となる地名呼称と現地での呼称を併記したものと考える。

この測量日誌に記録された土佐国の川名は、次の三河川

①吉野川：名称のみ ②仁淀川：「仁淀川あり、旧名贊殿川」 ③四万十川：上記のとおり

また、土佐藩先遣役として先導した奥宮弁蔵正樹の「測量日記」には、四万十川の記録はないが藩内の次の河川が記録されている。

①物の部川：「いと荒川にて流れさかし。葦生郷の山々志たた里の流れ集てかく大川と那れ」

②安喜川：「安喜川東西とて二処有り。常はかち渡りなるを此度は水まさりたりとて船・・」

③安田川：「安田川船にて渡り一里の松原を過て田野村」

- ④奈半利川：当国第一の荒川也。船にて渡る」
- ⑤羽根川：「羽根川船にて渡る。ここも例のかち渡りの地なれど例の水まして船も猶危げ也」
- ⑥ならし川：「元村と浮津との境にならし川と云ちいさき流れの・・」
- ⑦元川：「元川渡りて又ちひさき川有り。これなんかのならし川と云。」
- ⑧ならし川：上記のとおり
- ⑨浮津川：「浮津川渡りて室戸の湊など見つつ行。」
- ⑩崎浜川：「崎浜川水まして渡り場たど＼しき・・」
- ⑪市の瀬川：「領石の駅比江より一里と云。市の瀬川かち渡り也。」
- ⑫よしの川：「かのよしの川に添て行。上関村船渡り・・」
- ⑬魚梁せ川：「魚梁せ川仮はし懸く。・・」
- ⑭赤磯川：「半里斗り過て谷川有り。赤磯川と云。」
- ⑮新居川：「森山を経て西畠に至る。しばし小休して新居川の渡り船にて渡りて宇佐坂」

と 15 の河川を示している。奥宮は、5月 25 日、幡多の佐賀の地で先遣役を終え高知へ引き返しているため、四万十川の記述がないのは残念である。

▼幡多郡紀行（1858 年・安政 5 年 3 月 7 日～3 月 25 日/防意軒半開）

土佐藩士で俳人の防意軒半開が幡多路へ吟行したときの俳諧紀行集で奥の細道の土佐版といえる。安政 5 年（1858）3 月 7 日に始まり、3 月 9 日には幡多路の途中に窪川本村で宿し、翌 10 日には五社を詣でるが、「五社大明神参詣、町を放れ山を越へて往事十八丁、川有、橋を渡りて御旅所在」と、四万十川を「川」とだけ記し、「橋ありと云う景色なり春の水」と吟行している。前日の 9 日には「平串村より河井川を渡、大奈路村より呼声坂を越す」などと、詳細に現地の地名を記録しているのに、五社詣での難所である大川を「川」とだけ記したのは不思議である。

▼大日本管轄分地図・高知県管内全図

（1894 年・明治 27 年/大日本管轄分地図）

地図には「渡川」と河口部に記載され、支流は記載位置順に下流域から、本流筋は「有岡川」、「佐岡川」、「渡川」、「大宮川」、「吉野川」、「烏川」、「上山川」、「平串川」、「上山川」となり、最大の支流・梼原川は「西渡川」、「梼原川」、「北川」となっている。旧河川法が制定されるが明治 29 年（1896）で、それ以前の地図ではあるが公式な河川流域名称は「渡川」とする認識があったのではないか。この地図には「四万十川」の文字はでてこない。

当時の東上山村田野々で合流する梼原川を「西渡川」としているのは、公称河川は「渡川」で本流筋は不入山を源流域とするものであるから、梼原川をあえて「西渡川」と記録したのではないかと考える。

それにしても「上山川」の名称の初出はこの地図ではないか。ご丁寧にも窪川付近、松葉川付近にも「上山川」と付してあり、仁井田川の記載はない。その他の支流では、仁井田地域、東又地域を流れる川を「平串川」、現在の長沢川を「烏川」と表記している。



松浦武四郎 17 歳の旅野帳（1843）



1901 年・高知県管内全図(窪川分)

▼大日本管轄分地図・高知県管内全図（1901年・明治34年/改正7版）

四万十川は松葉川地域で「上山川」、大井野から下流を「仁井田川」、梼原川の合流点付近から下流域を「上山川」と記されている。また、これまでの高知県管内地図と同じように四万十川の最大の支流である梼原川は下津井から下流域では「西渡川」とあり、中平の上流域を「梼原川」としている。

地名では、土居を「新在家」、仁井田を「神ノ木山」、「中ノコシ」が西川角の上流部に書かれているなど誤りや大字の未記載地があるなど信憑性に欠ける地図である。

▼高知県管内全図

（1908年・明治41年版/大日本管轄分地図）

地図には「渡川」と河口部に記載され、支流は記載位置順に下流域から、本流筋は「中筋川」、「佐岡川」、「四万十川」、「大宮川」、「吉野川」、「烏川」、「上山川」、「仁井田川」、「平串川」、「上山川」となり、最大の支流・梼原川は「西渡川」、「梼原川」、「北川」となっている。

▼高知県管内全図⁵⁾（1923年・大正12年）



「四万十川」と記載され、「渡川」の記載はない。上流域の大正地域では窪川から流下する「仁井田川」と津野山を源とする「梼原川」とに分けて書いてある。小河川については記載されていない。

この地図は町村界を示し町村名と役場所在地を赤丸で示しているが、役場所在地の記述で松葉川村を「市生原」、東又村を「本堂」としている。面白いことに大正村の田野々から梼原に向かう道は「矢立往還」を、打井川から佐賀村へ向う山越えの道（塩の道）を示しているなど当時の往来が車ではなく牛馬の駄賃輸送が主であったことがうかがえる。

▼高知県管内全図（1931年・昭和6年）

「四万十川（渡川）」と記載されている。前述の大正12年の管内全図と比較して河川の名称は同じであるが、県道の記録が車の通行を主としたものになっており、通行できないところは破線で示している。また、役場所在地について松葉川村は「七里」に、東又村は「黒石」に改めている。1928年に河川法が制定され四万十川は正式名称として「渡川」となった。

（9）四万十川の名称経緯

土佐の小京都といわれる中村（現四万十市）に流れる四万十川。室町時代後期応仁の乱の勃発により一条家領のあった幡多庄・中村に下向した一条教房が、京の都を偲んでまちづくりをしたという。大川を桂川、後川を鴨川に見立てたということであるが桂川が元はなんと呼ばれていたかという記録は残っていない。暴れ川である四万十川は、過去の記録も消し去ったものであろうか。

その四万十川をメジャーにしたのはなんといっても「NHK特集 最後の清流四万十川」の番組放映だろう。それまで渡川と中流域でもそう呼んでいたが「四万十川」と呼ばないと乗り遅れてしまうような気分になってしまった。四万十川の名称論争は各説ある。橋田庫欣氏は『土佐史談』199-201号に3回にわたり「四万十川—その名称と変遷」、その後も『土佐史談』202・205・207号に「四万十川-名称の由来」と題して史資料を基にまとめているので読んでいただきたい。

橋田氏の論調は

- ・長宗我部地検帳には、大河、大川、渡川は出てくるが、四万十川の名はまだでてこない。
- ・四万十川と呼ばれたしたのはおそらく元禄2年（1689）の中村三万石断絶以後のことであろう

⁵⁾ 高知県立図書館デジタル化公開ページ<<http://kochilib.iri-project.org/>>

- ・宝永8年（1708）の土佐物語が、絵図以外の文献では今の所一番古い文献である。
- ・土佐物語には四万十川（わたりがわ）と記されていることから「四万十川一名渡川」のように二つの名があった。
- ・一条氏時代に中村では渡川と称したことが確実であることから、一条氏時代にはまだ四万十川の呼称は生まれていなかった。
- ・土佐州郡志の中村の項で「渡川 是四万十川之下流」とあるので渡川が川全域をさす名称ではなく、中村付近のみをいう名称である。
- ・土佐州郡志での呼称を地図にしてみると、多くの地域で「大川」と呼ばれていた。
- ・天和頃以降、土佐藩の追放刑の制度も次第に整って、渡川限西への追放刑も多くなり、渡川の名は藩内全域に知れわたり、川全域の名称のように思う者も多くなつた。
- ・伊能忠敬の測量で「四万十川又渡川」と併記されることにより、両論併記が明治へと継承された。
- ・昭和3年10月18日内務省告示により渡川が正式名称となった。

と書いていたように思う。氏は昭和3年の渡川の名称決定について「ボタン一つの掛け違い」と当時の内務省の決定を指摘している。また、土佐物語を初出の文献としながらも、土佐州郡志における四至等の記録をもとに整理しているが、本流は津野山川であること、仁井田川を引用していないことに不満が残るところである。

『長宗我部地検帳』『土佐州郡志』にみられる県内の川の名称をすべて拾い上げ「高知県下でも四万十川をはじめとして、大きな川すべてが大川と称されていた」とし「大川という名称は、支流の小さな川に比べて大きいから大川と称したまで、その川だけの固有名詞ではなく、各地の大きな川すべてに使われていた一般的な名称である」と結論づけている。また、渡川は中村付近の局所的名称であるとして「長宗我部地検帳（1589頃）並びに土佐州郡志（1722）をみると、中村付近だけが渡川で、上・中流と最下流は大川と称されていたことがわかる」と考察している。

四万十川名称論 これまでの「四万十川」の名称由来の各説を年代順にまとめてみる。

- ①四万十の流れを集めた／1789 天明9年／宮崎八野右衛門の説
- ②上流の四万川と中流の十川とを合わせた／1858 安政5年／防意軒半開の説
- ③上流の四万川と下流の渡川とを合わせた／1811 文化8年／岡宗泰純の説
- ④アイヌ語シマ説／1897 明治30年／寺石正路の説
- ⑤アイヌ語シ・マムタ説／1928 昭和3年／寺田寅彦の説
- ⑥アイヌ語シマト説／1953 昭和28年／建設省渡川工事事務所の誤写説
- ⑦アイヌ語シマム・トー・西の大川説／1997 平成9年／大友幸男の説
- ⑧四万石を十回流す流域山地の流送可能材木数説／1999 平成11年／野本寛一の説
- ⑨四魔（曼）・渡（十）川の吉田孝世の文学的創作説／1999 平成11年／腰山秀夫の説

大友氏の「西の大川」説は、寺田虎彦のシマムタ説にくらべ地味であるためか、四万十川の地名由来として一度も紹介されたことがない。シマント（西の・大川）と古くから伝えられてきた可能性があると推理するが今後の研究課題となろう。

日本語がどの語族に属するかといった日本語系統論も明確になっていないというのが言語学者・国語学者の見解である。諸言語から孤立した存在というのが日本語の実体であるのに、柳田国男以来の地名研究をする学者は、アイヌ語や縄文語や古代朝鮮語で地名を理解しようとする在野の研究者を冷ややかに傍観する。いつまでも地名の研究はあっても「地名学」として昇華しないのは四万十川名称論に似ているようだ。

（武内）

『土佐州郡志』に書かれた四万十川中下流域の川名と四至

| 地域 | 村名 | 現在の大字 | 四至 |
|------|---------|--------|----------------------------------------------------------|
| 松葉川 | 秋丸村 | 上秋丸 | 四至「西向大川之南」 |
| | 乘之脇村 | 窪川中津川 | 四至「東限大川・・」 |
| | 栗木村 | 窪川中津川 | 四至「東北限大川・・」 |
| | 中津川村 | 窪川中津川 | 四至「東限大川・・」 |
| | 一斗儀村 | 壹斗儀 | 四至「西南限大川・・」 |
| | 米の川本村 | 米奥 | 四至「東限大川・・」 |
| | 北之川村 | 東北ノ川 | 四至に川の記載なし |
| | 市生原村 | 市生原 | 四至に川の記載なし |
| | 作屋村 | 作屋 | 四至「東限大川・・」 |
| | 越行村 | 七里・越行 | 四至「西限大川・・」 |
| | 酉影山村 | 七里・酉影山 | 四至「南限大川・・」 |
| | 沖之野村 | 七里・沖代 | 四至「西限大川」 |
| | 志和影山村 | 七里・志和分 | 四至「東限大川・・」 |
| 窪川郷分 | 柳瀬村 | 七里・柳瀬 | 四至「西限川・・」 |
| | 西川角村 | 西川角 | 四至「西限川・・」 |
| | 東川角村 | 東川角 | 四至「西ハ大川・・」 |
| | 宮内村 | 宮内 | 四至「南限川越根々崎村」 |
| | 仕出原村 | 仕出原 | 四至に川の記載なし |
| | 大井野村 | 大井野 | 四至に川の記載なし |
| | 西原村 | 西原 | 四至に川の記載なし |
| | 若井村 | 若井 | 四至に川の記載なし |
| 立西 | 大向村 | 大向 | 四至「東南限大川・・」 |
| | 天之川村 | 天ノ川 | 四至に川の記載なし |
| | 川口村 | 南川口 | 四至に川の記載なし |
| | 秋丸村 | 秋丸 | 四至に川の記載なし |
| | 野地村 | 野地 | 四至に川の記載なし |
| 大正 | 家地川村 | 家地川 | 四至に川の記載なし |
| | 弘瀬村 | 弘瀬 | 四至に川の記載なし |
| | 北野川村 | 大正北ノ川 | 四至「南限上宮村大川」 |
| | 上宮村 | 上宮 | 四至に川の記載なし |
| | 上岡村 | 上岡 | 四至に川の記載なし。上岡谷北流南入大川 |
| | 下岡村 | 下岡 | 四至に川の記載なし |
| | 瀬里村 | 瀬里 | 四至に川の記載なし。瀬里之川南流入大川 |
| | 上山村本村 | 大正 | 四至「西南限大川・・ 津野山川在西仁井田川在南合流」 |
| 十和 | 上山村下分 | 大正 | 山川に「津野山川 過村西入大川」「仁井田川 自東至西合流津野山川」 |
| | 浦越村 | 浦越 | 四至「南限大川・・」 |
| | 茅吹手村 | 茅吹手 | 四至「北限大川・・」 |
| | 津賀村 | 津賀 | 四至「南限大川・・」 |
| | 細吉村 | 河内 | 四至「西限大川・・」 |
| | 四手村 | 昭和 | 四至に川の記載なし。山川に「大股谷 自北流出経村入大川」 |
| | 大井川村 | 大井川 | 四至「北限大川・・」 |
| | 窪川村 | 久保川 | 四至に川の記載なし。山川に「窪川谷 自北流南入大川」 |
| | 小野村 | 小野 | 四至に川の記載なし |
| | 上山下村大野村 | 十川 | 四至「南限大川・・」。白井川谷経村入大川 |
| | 川口村 | | 山川に「大川 自高岡出過村南」 |
| | 弘瀬村 | 広瀬 | 四至「東限大川・・」 |
| | 井崎村 | 井崎 | 四至に川の記載なし。井才谷 皆自東流西北入大川 |
| 西土佐 | 半家村 | 半家 | 四至に川の記載なし |
| | 江川村 | 本村 | 四至に川の記載なし |
| | 長生村 | 長生 | 四至に川の記載なし |
| | 下山村 | 江川崎 | 四至に川の記載なし |
| | 用井村 | 用井 | 四至に川の記載なし |
| | 橋村 | 橋 | 四至に川の記載なし |
| | 岩間村 | 岩間 | 四至に川の記載なし |
| | 茅生村 | 茅生 | 四至に川の記載なし |
| | 中半村 | 中半 | 四至に「大川経村中通下田此間九里・・」 |
| | 口屋内村 | 口屋内 | 四至に川の記載なし |
| 中村 | 窪川村 | 久保川 | 四至に川の記載なし |
| | 勝間村 | 勝間 | 四至に川の記載なし |
| | 鶴野江村 | 鶴ノ江 | 四至に川の記載なし |
| | 田出野川村 | 田出ノ川 | 四至「南北十六町村臨大川・・」 |
| | 高瀬村 | 高瀬 | 四至に川の記載なし |
| | 川登村 | 川登 | 四至に川の記載なし |
| | 手洗川村 | 手洗川 | 四至に川の記載なし |
| | 入田村 | 入田 | 四至「東西限、渡川南限具同村西限佐田村・・」 |
| | 具同村 | 具同 | 四至「東限、渡川・・」。山川に「渡川 村東」「中筋川 村南」 |
| | 中村郷 | 中村 | 山川に「渡川 在村西宿毛往還路自源津野山出與豫所川合是四万十川之下流過村入下田浦」「後川 在村東北亦流入下田浦」 |
| | 不破村 | 不破 | 四至「四万十川後川合流處・・」 |
| | 坂本村 | 坂本 | 四至「中村之南前渡川北接山・・」 |
| | 山路村 | 山路 | 山川に「山路川・・ 実崎界会大川」 |
| | 実崎村 | 実崎 | 四至「有大川出自豫洲界流過村」 |
| | 間崎村 | 間崎 | 山川に「大川 源出于土豫二列」 |
| | 福崎村 | 初崎 | 四至に川の記載なし |
| | 竹島村 | 竹島 | 四至「中村ノ南大川ノ側東北五十町・・」 |
| | 鍋島村 | 鍋島 | 四至「北限、渡川後川ノ涯及ヒ竹島村」 |
| | 下田村 | 下田 | 四至に川の記載なし。山川に「六町島 島西有大川」 |
| | 下田浦 | 下田 | 四至に川の記載なし |

2、四十万山のアラカルト

(1) 五郎丸

ラグビー日本代表の快進撃は、世界を驚かせたばかりでなく「Japan Way」の取り組みが日本人の誇りにもなつていった。そのなかでも有名になったのは五郎丸の所作で、子供たちだけでなく、大人まで真似する手のしぐさとなった。五郎丸は牛若丸のように武士の幼名に付けられるものかと思いきや苗字であるという。「苗字の90%は地名から」といわれるから電子国土Webで検索してみると全国にみられる地名で福岡県筑紫郡那珂川町五郎丸がルーツとされる。



春分峠（四十万町一椿原町境界）のトワイライト

「五郎」は石ころの多いゴロゴロとした地形の岩場・谷合を「ゴーロ・ゴロ・ゴラ」といいそれが転じて五郎の字をあてたものである。「丸」は中世山城の丸、中世の名田、幼名の△△丸が地名になったもののが山容をあらわす「マル（丸）」もある。

山名の丸は徳島県の海部山系に多く、五郎丸（ごろうまる・1148m）、貧田丸（ひんでんまる・1018m）、湯桶丸（ゆとうまる・1372m）、吉野丸（よしのまる・1116m）、神戸丸（こうべまる・1148m）、天神丸（てんじんまる・1631m）、塔丸（とうまる・1713m）などがある。高丸山や日ノ丸山など山を意味する丸にご丁寧にも山を加えた山名もある。また、有名な三嶺（高知県側さんれい・徳島県側みうね/1894m）、高ノ瀬（こうのせ・1741m）、丸石（まるいし・1683m）、次郎笈（じろうぎゅう・1930m）、一ノ森（いちのもり・1879m）、風呂塔（ふろんと・1401m）、寒峰（かんぼう・1605m）と普通の△△山とならない変わった山名が多い。徳島は山名のデパートである。

(2) 森と林と杜

徳島県の山名のマルはモリ（森）が転訛したマル（丸）であろう。森と丸については橋田庫欣氏が『土佐史談』⁶⁾誌上で詳しく述べているので参照されたい。

『民俗地名語彙辞典』はモリについて「森が山そのものを指す例は東北地方（青森県・秋田県）に最も多く、それに次いで四国地方（愛媛県・高知県）だという。東西相隔たって集中分布がみられるのは周囲残存分布といわれるもので、太古に山をモリという用法が全国的にあったものが、東西に分かれて残存したものであろうことが考えられる。（中略）森という語は本来、鎮守の森からきたもので、それが普通の木立の意味にも使われるようになった一と解される。「モリ」はフロ、ムロ、ヒムロという語と共に、おそらく神祭りをする神聖な樹林を指したものであろう。古くは「神社」をモリと訓ませており、「杜」という字が「社の森」に由来することがうなづける。」とある。山といえば今でこそ登山であり、頂を極めるピークハンターが主流となっているが、昔は山の神の依代であり信仰の対象となる「森」と「杜」であったことだろう。

「森」は樹木がモリモリと「盛り」上がったさまが由来という。ちなみに「林」は「生やす」の名詞化「生やし」で同じ種類の樹木が林立するさまで森に比べて規模が小さく深みがないように感じる。厳密な定義はなくイメージとして理解することになる。雑木林、薪炭林といい、生活に近い里山で暮らす人にとって山菜、木の実、シイタケや木炭の生産など生業の源としての場であるのが林であり、御留山として「禁私採伐」とされた奥山が森と思える。

一方、「杜」はその森の神を里で祀った鎮守の「杜」であった。字が示すとおり「社の森」である。例え

⁶⁾ 橋田庫欣 1997 「森と丸」『土佐史談』203号土佐の山とみどり特集号、23頁。

ば南国市から高知市へ歩けば農地や建物が広がるなかに樹林の森を見つければ屋敷林の習慣がない高知では社が祀られている。その所在から命名された森山・森脇などの地名や苗字は「お宮（社）の山・脇」で「森の山・脇」ではない。神社のある木立を指すのが由来であるという。

（3）山の呼称

山を意味する接尾語は「山（やま・さん・せん）」や「丸（まる）」や「森（もり）」の他、「岳（たけ）」、「峰（みね）」、「駒（こま）」、「嵐（ぐら）」、「仙（せん）」などたくさん見られる。

日本人にとって山といえば富士山である。日本の超一流クライマーであり地名研究者である古川純一氏（1923-）は『日本超古代地名解』⁷⁾で「アイヌ語で山をフチと言い、それが富士山の語源である」という。駿河國風土記では福地と書いてフジである。富士山の「サン」は山の呼称としては、大陸から伝わった新しい呼び名である。『常陸國風土記』では「駿河國の福慈の岳に至り」とある。岳は西アジアのウル国（ウル語）でダカンであり、それが紀元数千年前に沖縄人によってもたらされた。沖縄本島の山の呼称は岳が40で山が4のみである。対馬では岳は7で山が42となり、佐渡ヶ島ではついに岳は0になり、山（やま）が41、山（さん）が6、峯が3になる。山と岳は日本に渡來した時期が異っていることの証明である」と富士山の山名の由来と山の呼称の全国分布から山名の渡來時期を解明している。日本語は孤立した言語と言われる。いかに日本語の字音語が多言語（縄文語⁸⁾、弥生語、アイヌ語、大和語、古朝鮮語、漢字の漢音・呉音、ポルトガル語、オランダ語など）の影響を受けながら進化してきたことが良く理解できる。

日本の山の呼称は古い順に書くと、峯（ね）、根（ね）、峯（みね）、岳（だけ）、やま、山（さん）であるが、「富士山」にはこの全部の呼称があり、古くから親しまれてフチ、フジの呼び名があったことになる。松尾俊郎氏は『地名の探求』⁹⁾で「山に因むさまざまな名称は、人間生活の広い領域にわたってかかわりあいをもつからである。山谷からきた名や祀られた神仏の名からきたもの、そこの地域名との関連、水源地としての役割、境界的性格を示すもの、また山そのものをさす名称の多様性、山名の分布から見た地域的差異、交通路に関するもの、動植物の関係、気象現象とのかかわり、あるいは語源的に外来語との関係を考える上にも、山名は特異の対象ともなり、その地名的性格は複雑である」と山国日本の生活を考えるうえで山の持つ地名の意味を説明している。

山国土佐にあっては山それぞれに名称を付すのは大変である。平地にある山はランドマークとして役割を果たすが、山間では信仰の対象となる山など特徴のある山しか固有名詞にする利点がなくその他大勢は名無しの権兵衛山である。山の頂というよりその中腹から麓が利用する場所である。その山、その麓を特定したい場合は「△△谷」を基準とした方位で示すのが特定しやすいこととなる。山名に比べ谷川の地名が多いと気づかれるだろうがまさに利用地名たる所以であろう。

（4）入会林

山で暮らす人の利用地名として名づけられる「山」は、里山が主で焼畑や入会林として固有地名となっていたことだろう。村人みなで共同管理する山が入会林である。

四万十町に国重要文化財（昭和47年指定）・旧竹内家住宅がある。18世紀末ごろの茅葺平屋建てで、土間、中の間、座敷が一列に並ぶ四国南西部の典型的な構造の山間農家住宅である。この茅葺の葺き替えは村民共同作業となるが、その前準備としての葺の確保が大変である。世代に一度の一大事業である。その葺は村の入会林となる葺場で行われる。

『下津井村お留山記』¹⁰⁾には萱芝山について「萱芝山は各村の大部分の地域を占める広い面積の焼ヶ山

⁷⁾ 古川純一 2004『日本超古代地名解』彩流社、81頁

⁸⁾ 縄文語といった文字はないがアイヌ語と古代日本語の共通性を縄文語の由来が高いという森下年晃説

⁹⁾ 松尾俊郎 1985『地名の探求』新人物往来社、5頁

¹⁰⁾ 伊与木定 1973『下津井村お留山記（上・下）』高知営林局。寛政年代の御留山に関する古文書を刊本したもの。

(やけやま) であった。此焼ヶ山は年々春2、3月頃に地上の荊棘や雑物を焼き払って山草の更新を計り、4月頃から9月頃まで、毎日牛馬飼料の草を刈り採る。草屋根を葺く萱を刈る。5月頃田の肥料となる「カシキ」草を刈る、蕨粉製造のための蕨の地下茎を掘り、木炭用の「ダス」に編む大萱を刈る、食用の蕨の地下茎、ゼンマイ、イタドリ、ササナバ、トチ菜を探る。8月頃にはモクイ草を刈る。など村人の自由に入会できるものであった。この萱芝山も1か年の入会料として冥加米反当2升を完納せしめた」とある。この入会地も明治22年の大合併で各村々は法人格を失ったことから所有権登記を村民何名の共有地として登記されることになった。下津井は広大な御留山を抱える村であったが、今でも2か所の入会地を管理している。大向山814-10と金兵衛855-3の2カ所である。

金兵衛の隣の字が「催合」である。「催合」は共同利用の意味合いがあり、現在は国有林野となっているがここも入会地であったと思える。

松尾俊郎氏は『日本の地名』で「村や部落で共有している山林原野は、ふつう使われる入会林という名称のほか、カイト山（垣内山）・仲間山・惣山・モヤイ山（催合山）・総持山・込山・村山・立野・野山など名があり（中略）燃料等利用のコマギノ・コマギバヤシ・ナグリ・クレバヤシ・フシワラ・シバキ・シバノ・ハルキ・カナギ・ヤブバヤシ・ノテ（野手）など」と名称を列記している。四万十町で松尾氏の例示で探してみると次の字名を探すことができる。

ナカマ系 中間（天ノ川）、中間山（八千数）、奈賀間山（相去）

モヤイ系 催合（下津井）

コミヤマ系 コミ山（峰ノ上）、古味ノ平（日野地）、中込（弘見）、シモ込（大井川）、スミノゴミ（小野）、下モゴミ（十川）、上ミゴミ（古城）、五味（地吉）

ムラヤマ系 本村山（寺野）、本村山（南川口）、村中山（江師）

タテノ系 立野（東大奈路）、立野（大正大奈路）

シバキ・シバノ系 下シ場（仕出原）、芝ノ窪（小野川）、シバ（弘見）、芝野（志和）、唐芝山（地吉）、芝口（地吉）、ショガシバ（井崎）

ハルキ系 ハルキ（弘見）

ヤブ系 ツカヤブ（榎山町）、勝取藪（峰ノ上）、藪ノ口（東川角）、ツヅラヤブ（窪川中津川）、西ノ藪（床鍋）、藪ヶ谷山（影野）、揚盧木藪（魚ノ川）、ウツゲヤブ（魚ノ川）、シノベヤブ（魚ノ川）、影藪（奈路）、トリチヤブ（道徳）、ウツケ藪（大正）、藪山（瀬里）、ナカヤブ（希ノ川）、治部藪（打井川）、若藪（打井川）、上ヤブ（弘瀬）、シモヤブ山（大正北ノ川）、アカヤブ（鳥手）、アカヤブ（相去）、カクレヤブ（芳川）、カゲヤブ（江師）、カタギヤブ（大正大奈路）、高藪（大正中津川）、蔓藪（大井川）、竹藪（小野）、クサギヤブ（大道）、スギヤブ（大道）、西藪（大道）、藪ヶ谷（十川）、大藪（地吉）、折藪（地吉）、フキヤブ（十和川口）、茶ヤブ（広瀬）

ノテ系 ヨコノテ（古城）

カヤ系 カヤカリ（希ノ川）、カヤカリバ（里川）

音韻からスクリーニングした字名一覧であるので、実際現地を訪ねて悉皆調査する必要がある。昭和30年代まで利用された焼畑の場所と一致するところもあり関連性を考慮して探る必要がある。

（5）山の地名

▼うすき（薄木・臼木・臼杵） ウス（薄）はアサと同根の語。臼の字をあてる例が多い。「臼谷」は字義



国有林の林班境の表示

通りに解すれば、臼の形をした谷となるが、これらの多くは「浅谷」の意である。背後の谷沢が浅く、あまり奥深くないところからの命名。馬蹄形にえぐられた沢で臼形からきたのもあろう。

『民俗地名語彙辞典』はウスについて「アサの母音交替と考えるとアサギ（浅木）はフシの多い雑木。このような雑木林になっているところがウスキであろう」と書いてある。

『高知県方言辞典』にはアサギについて「木質のやわらかな雑木。桧松杉などの針葉樹以外の雑木であれば、たきものとして扱う場合はすべてアサギである」とあるが、ウスキの項はみあたらない。

四万十町の字に「アサキ」は見あたらないが「ウスキ」は多くの例があり、不思議である。「アサ・オソが全国的に分布するのに対し、ウスは周辺部に多いのが注目される」と吉田茂樹氏は述べているが方言周囲論から判断すべきか。「キ」は場所を示す接尾語「カ」の転訛もある。また、十川地区に横臼集落がある。『長宗我部地検帳』には「ヨコウス木」とあることからヨコ・ウスキを短縮してヨコウスを呼ばれるようになったのかもしれない。

【四万十町の字一覧】臼杵（秋丸）、ウスキ山（市ノ又・芳川）、薄木（大正中津川）、ウスギ（下津井・久保川）、ウスキ谷（広瀬）

【高知県の字一覧】アザギ（四万十市大用）は1例

ウスキ（香美市香北町日浦込・大豊町東豊永西川・須崎市浦ノ内西分・津野町上半山赤木・四万十市古尾・大月町口目塚・土佐清水市下益野・土佐清水市宗呂）、薄木（大豊町西豊永佐賀山・越知町佐之国・須崎市浦ノ内出見）、臼木（津野町北川・四万十市伊才原・四万十市西土佐長生）、臼杵（香美市物部町中谷川）と22例（四万十町含む）ある。

（6）四万十町の山名

「山」は一般的ではあるが、その読みはヤマかサンかザンと違ってくる。四万十町では山の読みはヤマしかないと思う。

公称地名としての山名は明治時代に陸地測量部が地形図を作製するときに整理されたもので点の記をみても地元の呼び名と違うものがある。読みもいろいろあるがRKC高知放送・高知新聞社が発行する『高知県地名辞典』の読みが地元での呼称を反映しているので確かだ。

また、吹の峰のように十和・津賀側からは「ふきのみね」、大正・江師側からは「ふきのとう」と同じ山であっても違った呼び名となる場合もある。土佐郡志に記録される山名と現在の山名とも少し変化がみられる。同一の山名は全国各地にある。全国の山名分布を統計的に研究した鏡味完二氏など多数おられる。分布の特徴的な点や山名の意味など各氏の書籍を参考にしたら理解が深まる。

四万十町の主な山を挙げてみる（電子国土Webに掲載している山名）。

▲「山」の山名 23座

地蔵山（じぞうやま：標高1,128m：愛媛県鬼北町△大道）

四万十町と愛媛県との境に位置する、四万十町の標高最高地点。国有林野名でいえば「小椎尾山」となる。伊予側と土佐側に二体の地蔵が祀られていることから山名となったのだろう。地蔵山・地蔵岳は全国に分布する。また地蔵峠は「日本山名辞典」に37か所も掲載してある。峠はあの世とこの世の結界、隣村との境界となるところから災いを遮る意味で地蔵が祀られることが多い。

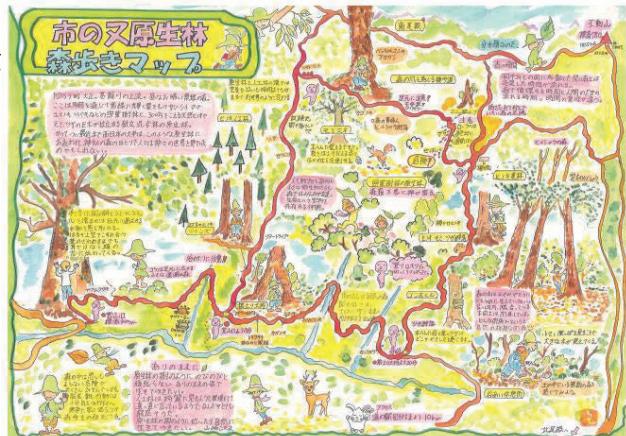
頂上付近は、クマザサに被覆されたブナの森に抱かれている。久保川から久保川谷を遡上して大道の番所谷に向かう。途中の丹念に手入れされた棚田の畔や石垣には十和の愚直な生き方を学ぶことになる。登山口は番所谷から林道に入るとすぐに表示がある。仁井田又との稜線を左右に登り、地蔵山に続く笹平山（標高1,034.8m）との稜線のタオにたどりつけばもう一時である。

不動山（ふどうやま：標高780.5m：四万十市△大正・つづら川集落）

四万十町大正と四万十市の境に位置し、国有林野名「市の又山」にある。主な登山口は大規模林道の不

動山トンネルのつづら川集落側にある。300年をこえる天然ヒノキとモミ・ツガの巨木の針広混交林の原生林。登山口から15分も登れば「根上り大将」が迎えてくれる。山名から判断すれば仏教の五大明王である不動明王を祀った山であろうが『大正町誌』『大正町史』のいずれにも記載はない。

日本山名辞典に5座の不動山（ふどうやま）の一つとして紹介されており、その他6座の不動山（ふどうさん）、7座の不動岳（ふどうだけ）を掲げている。



市ノ又（森下画伯の絵地図）

大小権現山（だいしょうごんげんやま：標高 693.0m：中土佐町△川ノ内・奥呂地）

四十町と中土佐町の境に位置する。登山口は奥呂地側、川ノ内側それぞれにある。

「山頂には権現神社があったが明治初年に神仏分離の公布により森神社と変わった。」と窪川町史に記載されている。この森神社（奥呂地字蕨山鎮座）、祭神は大山祇命で由緒書きには奥呂地村、川の内村、魚ノ川村など18か村の崇敬神として「大聖権現」と称していたと神社明細帳に記録している。権現山は全国（80座余り）にあり、社名の変更は強要されても山名の由来となる本地垂迹思想の「権現」山名は残ったことになる。近くには宇和島市の裏山「鬼が城山（1151m）」の南西に「権現山（952m）」が、石鎚山系の山莊しらさの北面に「子持権現山（1677m）」がある。

枝折山（しおりやま・806.3m・奥神ノ川△窪川中津川）

頂上に祠がありこの山を「枝折様」と地元では呼ぶ。山容が美しく、東又方面から見ると富士山に似ていることから「松葉川富士」とも呼ばれている。この東西の稜線は米奥から奥神ノ川、折合、相去、大正中津川、芳川と続く往還で昔は多くの人が利用した¹¹⁾。山名は往来のしるしとして枝を折りながら通過したことによる。今でも山道の分岐では行われる習慣である。この稜線には一等三角点「城戸木森」があり「折合ヒノキ」も近いが、現在では国有林の管理道で、分岐があいまいで遭難の多いところもある。

その他の接尾語が「山」となる四十町内の山名を電子国土Webで探してみる（標高順）。

霧立山（きりたてやま・1096m・下津井△梼原町△愛媛県鬼北町）、**笹平山**（ささひらやま・1034m・大道△下津井）、**小松尾山**（こまつおやま・850m・大正中津川△梼原町）、**大畠山**（おおばたやま・789m・大正中津川△梼原町）、**西峰山**（にしみねやま・719m・下道△大正大奈路△大正中津川）、**竹平山**（たけひらやま・682m・下津井△梼原町）、**鷹の巣山**（たかのすやま 654m・広瀬△四十市）、**扇山**（おうぎやま・651m・窪川中津川）、**重利山**（しげとしやま・640m・茅吹手）、**地吉山**（じよしやま・637m・里川△大正）、**大又山**（おおまたやま・620m・久保川△昭和・北ノ川）、**大中尾山**（おおなかおやま・620m・野々川）、**東峰山**（ひがしみねやま・618m・大正中津川）、**柳がさこ山**（やなぎがさこやま・608m・芳川△市ノ又）、**唐谷山**（からたにやま・607m・昭和△浦越△里川）、**崎山**（さきやま・568m・十川）、**源太夫串山**¹²⁾（げんだゆうくしやま・535m・相去）、**六川山**（むかわやま・507m・志和△興津）、**三崎山**（みさきやま・218m・興津）

¹¹⁾ 伊与木定『下津井村お留山記（上 55 頁）』には、木挽きされた木材を肩にのせ下津井から米奥經由で久礼までの人力運材したとある。

¹²⁾ 国土地理院地形図に「源太夫串山」とあるが点の記では四等三角点梅ノ元とある。森林管理署の地図では、この西方、芳川の境となる位置を示している。

▲「森」の山名 4座

鈴ヶ森

(すずがもり：標高 1,054.1m：日野地△梼原町△中土佐町)

旧窪川町の最高地点。2013年高知県展の洋画部門特選になった「森の回廊・巨大アカガシの森」で脚光を浴びた森下嘉晴氏¹³⁾が愛する山。登山口は春分峰付近にあり稜線づたいシャクナゲの群生もある緩やかな散歩道だが三町境付近では急登となる。

「照葉樹の葉っぱにきらめく光はまるで太平洋のさざ波のように見える」と森下画伯はいう。近年、トレイルランの愛好家が注目している。下山すれば松葉川温泉もある。

松尾俊郎氏は石川県珠洲市の山伏山の一名「鈴ヶ岳」の「スズ」は稻わらを乾燥させるために積み重ねて作る「稻積（いなづみ）」をいうスズ・スズキ・スズミなどの語からきたもので山の形が稻積に似ていることから山名としている例は非常に多いとしている¹⁴⁾。ただ、四万十町では稻わらを積み上げたのを「ワラグロ」といい、「スズ」とはいわない。

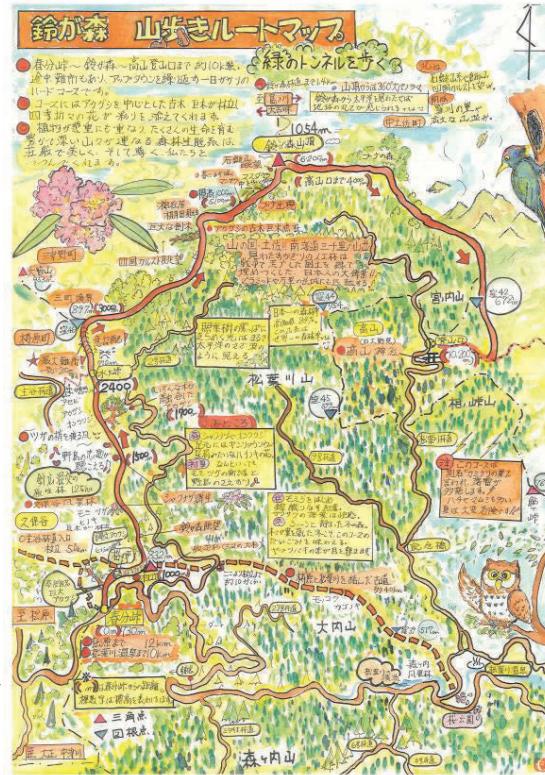
伊勢神宮は別名「イスズの宮」と呼ばれる。ここを流れる清めの川が五十鈴川（いすずがわ）でお参りの前にこの水で清める御手洗場である。「イ」は斎の意で、「スズ」は清水の湧き出るところの意と『民俗地名語彙辞典』に書かれている。東北地方では水神様を「オスズ様」といい、神棚に捧げるおみき徳利をスズという。清水（しみず）が転訛したのがスズとも思える。

『高知県方言辞典』でスズについて「徳利。（おもに「おみきすず」という）」とある。この「鈴ヶ森」、土佐州郡志（宝永年間（1704-1711）に編纂した土佐藩中期の村別地誌）などにも山名はみあたらないが、昔から徳利の形というより清水の源となる森を意味する「スズの森」となったのではなかろうか。

城戸木森（きどきもり：標高 908.35m：大正中津川△折合）

四万十町には一等三角点が2カ所あるがそのひとつ。点名は城戸木森（しろとぎもり）で、山名は城戸木森（きどきもり）である。『土佐州郡志』の中津川村の四至として「東限幾登幾」とあることから「きどきもり」と読むのが正解であろう。大正町史には「いくのほりいくもり」とルビを振っているが出典根拠は示していない。一等三角点ではあるが、地形図には山名の記載がなく不名誉な扱いとなっている。

大正中津川側の登り口は中津川林道を小松尾峠に向けて進み23支線を過ぎて大きなヘアピンを曲がり終えたころにある。4024林班と4028林班の境に位置し、登り口の標識がある。そこから窪川中津川との境稜線まで登りつめてからその稜線を南下すると窪川中津川の枝折山への稜線別れとなるので西に向い、幾分登ると城戸木森の頂上となる。視界は良くない。これより南下すれば折合のヒノキやオヒソの森にも行ける。往路は間違って枝折山に向い遭難しかけた人もいるので要注意。詳しくは森下画伯の絵地図をご覧あれ。折合側の登山口ももちろんある。



鈴ヶ森（森下画伯の絵地図）

¹³⁾ 森下嘉晴氏の絵地図はホームページ「四万十町地名辞典」の森下画伯の絵地図サイトを参照

¹⁴⁾ 松尾俊郎 1976『日本の地名』新人物往来社、195頁。

キトキとは面白い山名である。キは樹木のほか城や集落の意味もある。大正中津川集落から登り北東側に降りると窪川中津川集落となる。それも大正の森が内集落の大アザメから登り窪川側に降りるとそこも森が内集落ではないか。平成の町村合併で旧大正町の中津川と旧窪川町の中津川は大字名称の調整をおこなったが「森が内」は今もしっかりとその名をそのまま主張している。

堂が森（どうがもり：標高 857.4m：四万十市△野々川）

一般的には「堂ヶ森」となっているが国土地理院の地形図では「堂が森」。四万十市と四万十町野々川地区にまたがる四国西南山地に座する山。四万十川が左回りに蛇行する中心軸に位置する。古くは応仁2年（1468）、一条教房が土佐中庄村に下向するとすぐ街道工事に着手したが、その一つが中村～蕨岡～竹屋敷～上山郷への道で、そのときに地蔵を鎮守したことからこの山名となった。現在でも西土佐藤の川地区や野々川地区の住民が大切に保存し、奉納相撲



堂ヶ森（森下画伯の絵地図）

も行っている。全国的に人気の高い「四万十川ウルトラマラソン」は堂が森の峠を越え四万十川に沿って下るコースとなっている。同じ山名で石鎚山系二の森の西隣に座する堂が森（標高 1,689.4m）がある。

火打ヶ森（ひうちがもり：標高 590.5m：道徳△中土佐町）

四万十町と中土佐町の境にある山。『土佐州郡志』には仁井田郷道徳村の四至に「火打之森」とあり、久礼村には「燧之森山」とある。秀麗な山容は中土佐町からは尚よい。隣接する五在所ノ峯、大小権現山とともに修験の山と云われる。いかにも靈験漂わす山の姿である。

『民俗地名語彙辞典』（下 256 頁）では「三角形のトンガリ状を呈する山を三角山とか火打山という。昔の発火用具であった火打（燧）は三角形の火打袋にいた。建築で、組み合わせた二材を強化するための射材を取り付けたがその設置した形状が三角形であるためヒウチの名を用いた。」と三角の形状がヒウチの語源であるという。今でこそ自動車道ができる中土佐から七子峠を越える道を通らないことから見る機会もめったになくなつたが尖がつた三角の山はまさに「火打ちの森」である。

尾瀬には百名山「燧ヶ岳（ひうちがだけ）」がある。燧ヶ岳の由来も「火打ち石がたくさんとれた」、「村の人に火おこしを教えた山神を燧（火打ち）大明神と呼んだ」、「雪渓が鍛冶屋で使われる『火ばさみ』に見える」などの説がある。雪形から田起こしを始める「時知らせ」として山名を付けたのは白馬岳や駒ヶ岳などがある。春を待ちわびる雪国だからこそ、雪渓を『火ばさみ』と見て名付けたのも頷ける。この山のピークが柴安峠（しばやすぐら・2,356m）、次のピークが難解地名の俎峠（まないたぐら）。この峠は山名というより切り立った崖となる山頂の形状名称であろう。ゴツゴツした登山道ではあるが、対峙する至仏山とセットで尾瀬を楽しんでもらいたい。

▲「峰（峯）」の山名 2座

五在所ノ峯（ございしょのみね：標高 657.96m：金上野△黒潮町）

四万十町にある二つの一等三角点の片方が、この五在所ノ峯である。また、全国 48 点しかない「天測点（八角形の柱）」がある。窪川の人々が愛する山として親しまれてきた。初日の出をここから望むと眼下、興津の海に拝むことができる。金上野登山口となるカロウトウには大きな看板もあり、小一時間で登れる。佐賀の側からみるとその山の姿は美しく修験の山と思わせる。

『南路志』には「文武天皇大寶の初年に役小角土佐に来りて、清淨無垢の峠にて小角来りて国家鎮護の

修法せし所なればとて、高岡・幡多二郡の山伏集ひ来りて先例の護摩有とぞ。(同3巻p310)」と書かれ、東の横倉山とともに古来より土佐の修験の山として有名で、頂上付近には修験場の跡もある。別名を降在所山とも云われる。信州の上高地が神降地から転訛したものとの由来と同じか。上高地オフィシャルサイトは「上高地は古くから、神降地、神合地、神垣内、神河内などとも呼ばれ、神々を祀るにもつともふさわしい神聖な場所とされてきました」としている。古川純一氏はアイヌ語「コッヂヒ」の意味の縊みとしての河内であるとしている。

山名の由来は、山頂から五つの在所（人里）が見渡せる峰であることから「五在所の峰」と言われている。五つの在所とはおそらく仁井田五人衆（東・西・窪川・西原・志和）、五社（東大宮・今大神宮・中宮・今宮・森ノ宮）、五羽の瑞鳥（孔雀・白鷺・雉子・鳩鴿鳥・金鳥※南路志③p310）などから仁井田五人衆の領地を意味するものだろうが、「降在所山」を後の者が五人衆にあてはめ「五在所山」と読みかえたのではないかと推理する。

吹の峰（ふきのみね・ふきのとう：標高 700.2m：津賀△西ノ川△ 江師）

津賀の川と西の川と銚子の川の源流点。点の記では「二等三角点・銚子ノ川」とある。江師寄りの双耳峰には地蔵二体が祀られている。国有林野地内。昭和の時代まではしっかりとした防火帯も設えていたが今は荒れている。その防火帯を下ると通称「ゴバンノダバ」が平坦地をなしている。早春、葉の伸出より先に花径が伸びだすそれを「ふきのとう」というが、江師側の呼称は「ふきのほう」が転訛したものだろうか。

この吹の峰は、南流する椿原川と西流する四万十川の合流付近の比較的高い山であり、雨雪や風向など気象の変化する地帯である。地元の人もこの山頂の雲の変化を見て農作業の判断をしていることから「吹の峰」と呼んだのではないかと推論する。
(武内)



鏡平池から槍ヶ岳（岐阜県）

3、焼畑地名考

（1）山の暮らし

民俗文化映像研究所の姫田忠義所長が、自ら撮影した記録映画「椿山－焼畑に生きる（1997/高知県）」を携えて旧大正町（四万十町）の大正中央公民館にやってきたのは15年位前のことであった。それ以降「粥川風土記（2005/岐阜県）」「シシリムカのほとり（1996/北海道）」「奥会津の木地師（1976/福島県）」なども上映された。上映会の呼びかけ人は、いつも無手無冠酒造の山本紀子さんで、映画鑑賞の後、姫田所長を囲んでの座談会は恒例となっていた。

「四万十川の景観は素晴らしい。ここに窪川町の大向は住みたいところだ」と話していた。その夜は四万十町江師の民宿「おふくろ」でアユ料理を囲んでお酒も飲んだ。「毎朝、陽の出る位置を記録しなさい。鎮守の森の植生調査をしなさい」と江師の景観を愛でながら課題を投げかけた。ゆっくりと優しく、かつエネルギーッシュな話は自然とひかれていく。姫田氏が亡くなったのは2013年7月29日、84歳であった。日本各地に残る基層文化と狩猟や焼畑、川漁などの山の生業を映像に収めた氏の作品群は150本を超える。

きざまを4年間にわたって記録した民俗映像である。日本での焼畑は終焉している。これが最後の焼畑記録映像であろうが、姫田氏はこのほかにも「西米良の焼畑（1985/宮崎県）」「奈良田の焼畑（1986/山梨県）」「茂庭の焼畑（1992/福島県）」「竹の焼畑（2001/鹿児島県）」の焼畑作品がある。また、『土佐民俗』誌上に焼畑をはじめとした山の暮らしを報告していたのが田辺寿男氏で彼の写真は秀逸である。『土佐民俗』は通巻100号をもって2016年に終刊となつたが、高知県内の昭和の生活を刻んだ55年の土佐民俗学会の記録は輝かしい。

（2）山は畑

昭和30年代になって山の暮らしは大きく変化した。エネルギー革命により山の主要産業であった木炭が衰退し、産業構造の変化から次世代の若い労働力は金の卵として都市に送られた。当然ながら焼畑も消滅した。戦後の木材需要で山が潤ったのはつかのまで、山の暮らしに希望が持てなくなつた。当時の高知の山の暮らしをルポルタージュしたのが高知新聞社の連載「山よーあすの指針求めてー」である。戦後の木材需要のあとに植樹された人工林の間伐が大きな課題となつた。そこに山の毛細血管となる「作業道」の手法が取り入れられた。

四十万方式作業路網として環境にやさしい作業道工法を習得・普及しているのが四十町役場OBの田辺由喜男氏¹⁵⁾。彼の口癖は「山は畑。多くの実りを授けてくれる。作業道は山に栄養を運ぶ毛細血管」。稻は田にあしげく通う足音が育てるという言葉は、山にも言える。山に通い、木を伐り、運び、山菜を採り、薪を担い、猪を獲る。山で暮らす人は、まさに縄文的な暮らしである。その中に焼畑があつたのだろう。

（3）都市の論理「クスノキは残った」

話は余談となるが、「弥生人」は高知城の樹木を伐採してはいけないとクレームをいう。手を加えてはいけないという。お城の松、楠、ケヤキ、桜など人工林に庭師の手を入れるのを拒むとはどういうことか。県の公園責任者は県民の反対意見が寄せられたため、方針転換して伐採を断念したという。「事前説明が十分でなかつた。広く意見を聞いていくようにしたい。」とコメントしている。人工林の修景に色々な手法があるなかで、「クスノキは残った」を結論にしたのは、修景の技術論ではなく、大きな蔓に巻かれたのだろう。

この「クスノキは残った」論議は、イメージとしての環境保護論に陥つては危ういことになる。老木を伐ることによって生まれる林冠ギャップは、次世代の若い樹木の生長を促すのである。薪炭林は伐採することで萌芽更新した生命力ある樹相に生まれ変わる。山は木を切ることによって成長し、山は人工的な手を加えないと貧相な植生となつてしまう。山で暮らす人がいなくなれば山は死んでしまう。

（4）縄文の思想

平成の大合併で四十町が誕生したが、特徴的なのが郡域を越えての合併であった。高知県の郡域を越えた広域行政がこの選択を進めるに至つたのは確かである。ある町長が「山間農業で暮らしを成り立たなければ、台地の農業へ働きに来ればよい」といった。ちょっとした経済効率からの発言であろうが、山から人がいなくなる政策は百年の計を誤ることになる。四十町は縄文人と弥生人の結婚でもあった。縄文人は、森から富をいただく知恵と感謝、その果実を分配する約束を守る学者。弥生人は、稻作ゆえに、自らの裁量による生産と収奪を契約で成長させる経済学者であると思う。どちらがいいというわけではないが、どちらだけでもいけない。

木を伐る人が生業としてなりたつことは、「山で暮らす技術と知恵の伝承者」を次世代につなげることを可能とし、集落としての人々の群れが他の生き物と共に生活する世界を繋げられることである。「山間」は、歴史における動乱期には逃れる世界として人やモノを匿い、飢えたものを癒し、成長期には都市へ人

¹⁵⁾ 田辺由喜男、大内正伸『山を育てる道づくり—図解 これならできる安くて長もち、四十万方式作業道のすべて』（農山漁村文化協会、2008年）

とモノを供給する兵站基地の役割を果たした。この広い山という空間はいつも国の安全弁の役割を果たしている。一方的な都市の論理はしなやかなバランスを壊してしまう。

自然破壊と思われがちなゴルフ場が、生物多様性を育んでいるという。水辺の流水、乾燥地、芝生、植え込み、沼地、森林など変化のある環境が多くの動植物の食物連鎖を助けているという。バランスは一片の思考や見た目だけではわからない。焼畑は火入れの行為から二酸化炭素を排出すると環境破壊の元凶のようにいわれる。果たしてそうだろうか。



(5) 焼畑とは

「時間的にも空間的にも、わが国と深いかかわりを持ち続け、わが国の民俗文化の重要な基盤をなしていたのであった。(中略)これまで総じて稻作を基盤とした民俗文化の調査研究が主流をなし、焼畑・畑作系の民俗文化の研究は希少だといえる。」と焼畑の終焉を見とどけた野本寛一氏が発表したのが『焼畑民俗文化論』(1984年)である。野本氏はその後1999年に『四万十川民俗誌』を書きあらわしている。「川は暮らしと生業の母である」と冒頭に述べ、上流域の梼原町では「源流部生活生業誌」として大田戸や大蔵谷、四万川の山の暮らしを記録している。

「焼畑」は、叢林を伐採・火入れしてその灰を肥料として3年から5年、ヒエ、アワ、大豆、小豆、トウモロコシ、ソバ、タイモなどの作物を作り、地力が減退したら山に返し、20~30年の周期でもとの場所に帰るという長いサイクルの生業である。その間、有害鳥獣から焼畑を守るための狩猟技術の発達とともに、生産性が低いゆえに漁労や木工、染色、機織り、薬草など多様なモノづくりの技術も発達していった。

(6) 「きび」と高知のくらし

かつて焼畑王国であった山国高知。焼畑でのキビ栽培は四国の山間地に集中していたという。

キビは、日本の五穀の一つでイネ科の1年草。「黍」の漢字が当てられる、黍団子のキビである。が、高知県でキビといえば、煮キビ、焼きキビ、はったい粉と日常食のキビであった。

今では、トウモロコシになり「スイートコーン」と呼ばないと子どもも見向きもしない。モチキビが一番おいしいと思うのだが。そんな「キビ」の企画展が、高知県立牧野植物園で開催された(2017年7月15日~10月9日)。

この企画展の展示担当の学芸員川上香さんが高知新聞に寄稿した「トウモロコシの民俗誌」を読んで、足を運ぶことになった。山間での暮らしを切り取ったような展示構成は、魅力的で子どもの頃を思い出しながらの楽しい一日だった。展示されたキビに「下津井キビ」や「田野々キビ」があり产地・江師(四万十町)とあったことから奥方が栽培したキビではないかと疑ったくらいである。川上学芸員の足と耳で丁寧にフィールドワークを行った展示だなといたく感動した。図録もきっちりと編集されそれも無料配布。さっそく雑穀研究会に入会し「キビをつくるぞ」と決意した次第で、展示のチカラに恐れ入ったことだった。企画展の帰りにはミュージアムに立ち寄って牧野博士の十五カ条の学問心得「赭鞭一撻(しゃべんいいたつ)」を書いたノートを数冊買ったので、キビの研究成果を富太郎風に倣って記録してみよう。

後日譚、下津井(四万十町)を訪ねてキビの話をしたら「下津井のキビはできがわるーなった。来年は



すばの太い大道キビを植えろうと思いゆう」と森洋子さんは大道キビを勧めた。来年の夏には四万十町内全部廻って、キビの作付けを調べるのも面白い。

(7) 「畑」か「畠」か

ハタケを漢字に当てるとき「畑」と「畠」と「甫」と「圃」がある。

字源辞典・字統には

●「畑（畠） はた・はたけ」(694 頁) 国字 火と田に従う。焼畑。水田をいうのに対して、草を焼いて開墾した陸田をいう。古くは焼畑耕作がひろく行われていたので、このような字が作られたのであろう。中国で火田というのは、古くは狩猟のことであったが、のち焼畑の意にも用いる。

●「甫 ホ・フ・なえぎ・はたけ・はじめ」(777 頁) 象形 苗木の根をかためる形。のち上部は父、下部は用の形となるが、もと苗木の根をかこむ形であった。甫は苗木で植樹のはじめをいい、その圃を甫田、苗木を輔（たす）けるためかこみをつけるので、輔・補の字は甫に従う。

●「圃 ホ・はたけ・その」(778 頁) 会意 口（い）と甫（ほ）に従う。甫は苗木の根を包んだ形。その植樹のところを圃という。菜を植うるを圃といい、果樹を植えるところを園という。

畑も畠も国字（漢字ではなく日本で作られたカソジ）で、火+田が焼畑のハタ、白+田が水をはる水田でない乾いた田で、普通にいわれるハタケ。畑が主流として使われるのは、畑が常用漢字（畠は常用漢字でない）というルールがあるため、使われる頻度の違いにあるのだろう。常用漢字を答申する文化審議会国語分科会は、本来の漢字（国字）の意味を変えてしまった犯人である。

『民俗地名語彙辞典』には「ハタケ（畠）は常畑・熟畑、ハタ（畑）は焼畑。焼畑は、山を焼いて種を播き、灰を肥料として数年作付けして肥料が乏しくなると土地を休ませ、何年かしてまた焼く。常畑は、肥料を入れて連作する。この二つの中間にあるのが、アラクまたはアラキと呼ばれるもの。アラは曠野をさす語らしく、アラク切る、アラク越すなどは常畑候補地を造成している。畠を作らぬ焼畑から、畠を作ってアラクにし、ソバ、アワなどを輪作し、三年目からハタケと呼ぶ地方もある。焼畑はおそらくこういう経過を辿って常畑となる。ハタケのケは、畑に生えている植物のこと」とある。

(8) 土地台帳の「畑地名・畠地名」

四万十町の土地台帳にみられる「畑・畠・ハタ・ハタケ・バタ」関連の字は次のとおりである。ただし、土地台帳を調査した明治のころは、畑と畠の語彙の違いではなく、記録者の思いから漢字が当てられたようだ。地名は読みで日常的に利用される。当時、呼ばれていたホノギ地名数カ所を一つの字にまとめた経緯もあり、どの漢字（カタカナ）を当てるかは、土地調査を担当する役人の地名への好みや漢字取り扱いの癖も影響したのであろう。

ハタの音は「畑」だけでなく、「端」、方言で「そば」「近く」の意もある。例えば「ツエハタ」が潰えた畠なのか潰えた所の近くなのかは判明できない。

公称地名とはいえ経年による転訛も見られる。明治以降、土地台帳の複製編纂作業中の転載ミスや固定資産税の課税電算化時の入力ミスも多くみられ、「オーハタ」と呼ばれる地名も「大畑」「大畠」「王畑」「奥畑」「オウハタ」「オオバタ」「ヲヲハタ」、時にはオハタと聞き取って「小畑」となり「コバタ」と読んで逆の意味にもなってしまう。

▽畑：77か所（窪川44か所、大正6か所、十和27か所）

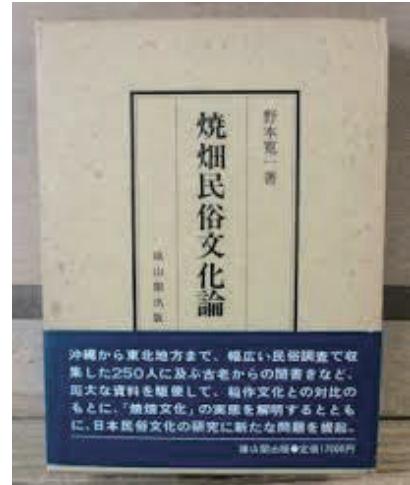
・農地の方位、高低、形状の違いによる命名

大畑、中畑、小畑、長畑、高畑、上畑、横畑、平畑、向畑、五反畑など

・耕作者や耕作物を献上する由来による命名

小太夫畑、新屋畑、弥次郎畑、太夫畑、天一畑、伊勢畑など

- ・農地周辺の樹木や寺院などのランドマークを示す命名
 - 楓畠、三ツ畠、永泉畠など
 - ・畠の性質を示す命名
 - 石畠、笹畠、古畠、奈路畠、千日畠、荒神畠、川原畠など
 - ・作物に由来する命名
 - 桑木畠、桑畠、カジ畠、薩摩畠、茶園畠、キノコ畠など
- ▽畠：25か所（窪川2か所、十和23か所）
- ・農地の方位、高低、形状の違いによる命名
 - 大畠、小畠、横畠、高畠、長畠、平畠、中畠など
 - ・耕作者や耕作物を献上する由来による命名
 - 太夫畠、竹ノ丞畠など
 - ・農地周辺の樹木や寺院などのランドマークを示す命名
 - 川畠、野路畠など
 - ・畠の性質を示す命名
 - 奈路畠、陰地畠、クボ畠など
- ▽ハタ：16か所（窪川2か所、大正5か所、十和9か所）
- ・農地の方位、高低、形状の違いによる命名
 - 下モハタなど
 - ・耕作者や耕作物を献上する由来による命名
 - タクミハタなど
 - ・農地周辺の樹木や寺院などのランドマークを示す命名
 - ホリハタ、タカヒハタなど
 - ・畠の性質を示す命名
 - タキハタ、ナロハタ、今ハタ、ツエハタ、カゲノハタ、ステハタなど



「畠・畠・ハタ」地名の数からみれば、窪川48か所、大正11か所、十和59か所である。十和が多いのは想定されるが、大正の数が極端に少ないのが気になる。

(9) 焼畠地名の町内分布 野本氏の『焼畠民俗文化論』¹⁶⁾で示された焼畠地名について四万十町での分布を字名から探ってみた。現地踏査のできていない部分は今後補完していく。

一 焼畠呼称型

1. 火・焼地名

雑木を夏伐って夏焼く「夏ヤブ」と、秋伐って翌春焼く「秋ヤブ」または「春ヤブ」とがある。夏ヤブは除草の手が省けるので、笹や雑草の多いところをこれに当てる場合が多い。春ヤブ、秋ヤブ系に属するものでハルヤマがあるが、夏焼きに比べて、これがきわめて少ないので、焼畠卓越地域では、主食としての稗、粟を栽培する「春焼き」が一般であり、むしろ夏焼きが特殊であった。（同書303頁）

四万十町では「夏焼」「夏ヤケ」の字名が多い。

▽火

ヒノ谷（金上野）、ヒノロ（窪川中津川）、ヒノクボ（影野）、ヒビ原（数神）、火打岡（奈路）、火打ヶ森（道徳）、ヒノ木山（弘瀬）、ヒノロ（芳川）、ヒノ谷（下津井）、ヒノヲガトウ（野々川）、ヒナワ谷

¹⁶⁾ 野本寛一『焼畠民俗文化論』（雄山閣、1984年）

(昭和)、ヒノジ (昭和)、ヒミチ (大道)、ヒコヲ (大道)、ヒソヲ (大道)、ヒノクチ (大道)、ヒノサコ (十川)、

※「ヒ」は樋ノ谷などの樋で水利関連の地名か、日ノ地などの日で日照関連地名か

▽夏・秋・春+ (焼)

夏焼 (窪川)、ヤケキ (金上野)、焼木川 (見付)、夏ヤケ (南川口)、夏ヤケ (市生原)、ヤケヤノ川 (七里)、焼木谷 (興津)、ヤケソ (希ノ川)、ヤケソ谷 (久保川)、ヤケソ (大道)、ヤケソ川 (古城) ウチハルキ (弘見)、ハルダニ (大道)

※ハルは季節の春でなく開墾の墾 (ハ) るの意もある。松尾俊郎著「日本の地名」に「秦野地方の切替畠はふつう、草ヤブを焼くのではなく、十年くらい雑木を育て、それを切り出して、その3、4年間、肥料なしで畠作したのである。どこで聞いても育てる木は主としてハンノキ (榛) である。根が深くなく根起しが楽、実生で育つ、成長も早い、萌芽更新もなく土地の養分を吸いとられない利点がある (61 頁)」。ハルキ・ハリギ (針木) はハンノキかもしれない。低地や湿地など過湿地にもよく育つため護岸林となることが多い。

2. 輪作地名

焼畠は伐採・火入れから4年前後作るのが普通で、各年の呼称は多様で一定しない。

焼畠1年目を静岡県では「アラク」「アラキ」と呼ぶ地方が多い。焼畠を起こすことを「アラキ (荒起) をオコス」という。新しく開墾した所の意か。

焼畠3年目に使う場合が「クナ」。「クナ」は「来勿」で「クナドノサカヘノカミ」のクナと同様禁足を示す語と考えられる。(同書 304 頁)

野本氏の著作『四万十川民俗誌』¹⁷⁾ に梼原町大田戸地区の焼畠輪作伝承に輪作呼称が「1年次が“アラチ (作物: キビ・ヒエ)”、2年次が“コナバタ (作物: キビ)”、3年次が“コナバタ (作物: 大豆・小豆)、4年次も“コナバタ (作物: キビ)”」と書かれている。また梼原町大蔵谷では「キリハタ (1年目)」「クナハタ (2年目)」という。

▽アラク・アラチ

アラヒラ (弘瀬)、アラキサコ (鳥手)、アラタサコ (鳥手)、アラ谷 (相去)、アラタ山 (相去)、アライバ (下津井)、アラヒラ (下津井)、アライバ (昭和)、アライバ (戸川)、中カアラ (古城)

※アライバは「洗い場」若しくは「新しい井 (水取り口)」の意もある。

▽クナ・コナ

小奈路 (床鍋)、小奈良地 (仁井田)、小成川 (打井川)、クナ岩口 (大井川)

※「焼畠が地力衰えて使えなくなることをクナといい、したがってクナバタとかクナサクと言えば三年目または四年目のことである」(『総合日本民俗語彙2』494 頁)

3. 循環地名

4年前後の輪作をした焼畠地は、短い所で15年、長い所で30年の休閑期間をとる。その間、山は放置され、やがて樹林が蘇生するのである。「ソーリ」「ソリ」「ソーレ」「ゾーリ」「ゾレ」などの地名がある。柳田の『地名の研究』(文庫 85 頁)に“ソリ”は動詞にしてソラスといふのが荒らすことである。三年、五年と山を畠にして作るのがサス、それを再び樹林地戻すのがソラスであったかもしれない」と述べている。

山にもどすことを「アラス」という地方が多い。

¹⁷⁾ 野本寛一 1999 『四万十川民俗誌』 雄山閣。梼原、東津野の焼畠など山の暮らしが克明に描かれている。

▽ソリ → 詳しくはソリの項

ソリタ（高野）、上ソリ田（若井川）、ソリタノ内（宮内）、曾理田（仕出原）、ソリ（飯ノ川）、ソリヤシキ（鳥手）、ソリ（芳川）、大ソリ（江師）、柿ノ木ソリ（大井川）、曾利（大井川）、ホソリ（戸川・地吉）、ソリ田（井崎）

※ソリには焼畑地名のほか、ソル（反る）からきた崩壊地名もある。『窪川町史』（59頁）に、窪川付近では微高地が河川に並行して連なる地形を「おきぞり」と呼ぶとある。

▽アラス

嵐山（平串）

4. 伐採形状地名

「薙ぐ（なぐ）」という動詞の運用形「薙ぎ」が名詞化したものとしては、日本武尊の伝承で名高い「草薙」がある。草薙は、いうまでもなく、日本武尊伝承成立以前に成立していた焼畑系地名である。焼畑のために草木を薙ぎ払うことであり、また、薙ぎはらわれた場所を意味する。南会津では「カノ」、信州では「カンノ」但馬では「カリュウ」。焼畑地名の一つに、草木伐採を示す地名があったことが明らかになる。山崩れをナギと呼ぶ。焼畑地名か山崩れ地名かは厳密な考証を（同書308頁）。

▽ナギ

※四万十町には事例がないが、柳ノクボ、柳ノサコ、柳ノナロ、柳尾、柳谷は多くみられる。ナギがヤナギに転訛したかは不明。

▽カノ・カンノ

官ノ屋式（魚ノ川）

5. その他

「コバ」は九州地方の焼畑呼称である。

▽コバ・キバ・木場

大木場（東川角）、大木場（西川角）、大コバ（米奥）、コバサコ（平野）

二 収穫表示型

1. 多収量表示地名

「クラ」は元来、神靈の座を示す語で、磐座（いわくら）、真座（まくら）、座位（くらい）などの語を形成する。山地、特に焼畑文化圏にはこれとは別に多収量地、豊作地を示すに「クラ」をもつてする傾向がある。

山中に、実際に倉を建てなくとも、倉に収めるべき穀類がたくさんとれるところに「クラ」という名をつけて呼んだ。不作の土地は地名として子孫に伝えられた（同書310頁）。

鍋・釜・倉に伏せる、割る、欠けるという名称を加えて表示した。

▽クラ

倉谷（窪川）、庫床（七里・西影山）、古庫（七里・柳瀬）、岩倉（床鍋）、大倉（本堂）、ヲクラトコ（下津井）、倉本（大井川）
※不作表示地名・倉掛（土居）

三 出作り関係型

1. 小屋地名

遠隔地に焼畑を営む場合、人びとは出作り小屋を作つてそこへ泊まりこみ、播種、草とり、収穫をした。集落に比較的近いところで焼畑を行う場合でも、作物に害を与える猪を追うタオイ小屋を作つていた。焼畑と小屋とは密接に結びついていた（同書312頁）。炭焼きや木地師の小屋もあるので周辺地名などで見極めたい。

▽小屋・古屋・木屋・コヤ

小屋ヶ谷（若井）、小屋ヶ谷（寺野）、古屋ノサコ（寺野）、小屋ノヤシキ（南川口）、コヤ（天ノ川）、
小屋谷口（勝賀野）、コヤノ谷（上秋丸）、コヤノナロ（上秋丸）、古屋谷山（東北ノ川）、古屋（六反
地）、古屋ヶ谷（与津地）、古屋ノ谷（大正）、コヤノ谷（上岡）、中ゴヤ（打井川）、コヤカ谷（打井川）、
コヤカ谷（上宮）、コヤノ前（弘瀬）、コヤノ畠（大正北ノ川）、コヤノ谷（市ノ又）、ナカゴヤ（芳川）、
コヤノ谷（小石）、小屋ノ畠山（木屋ヶ内）、木屋ヶ谷（昭和）、古屋（大井川）、ナカコヤ（十川）、コ
ヤヶ谷（古城）、ダシコヤ（古城）、古屋ヶ谷（地吉）、コヤ（井崎）、コヤノツ（井崎）、中ゴヤ（井崎）

2. 収穫作業地名

焼畑の出作り小屋の付属物の一つとして、収穫物を乾燥させる「ハサ」があり、方言ではある「ハザ」
「ハンデ」などが地名として残っている。

▽ハサ

上ハサ（大井野）、ハザコ（宮内）、ハザコ（七里・小野川）、クロハザ（一斗俵）、ハザコ（市生原）、
石ハサコ（数神）、スクノハサコ（数神）、スダノハザコ（黒石）、楠ハザコ（奈路）、クリノキハザコ
(弘見)、柳ノハザコ（弘見）、スダノハサコ（志和峰）、ハザコ（大正）、ハサコ（鳥手）、ハサノ谷（昭
和）、松ノハザ（昭和）、ハサ（戸川）、ハサ（古城）

※「ハサコ」は土佐の方言ですき間のこと。谷が迫る狭隘地のサコ（迫）と同じ意か。「石ハサコ」は
石の隙間を貯蔵庫として利用したのかもしれない。ハサに接尾語のコを付したのかもしれない。餡
子（餡+こ）、判子（判+こ）、根っこ（根+っこ）、端っこ（端+っこ）、隅っこ（隅+っこ）の例。

※「スダノハサコ」のスダは土佐の方言でまったく収穫のないことをいう。空っぽの貯蔵庫の意味に
もとれる。

四 人名型

稻作地帯には、主として新田開拓地に開拓者の名を冠する人名型が多い。焼畑文化圏においては広
大な山地のある部分に、人命を冠して所有を示す方法があった。「〇〇作り」という形は明らかに焼畑地
名であり、その他も焼畑地を示す場合が多い。椿原町はこの「・・作り」地名が特に多い。

▽作り

一郎九郎作（仕出原）、春次作（仕出原）、弥十郎作（勝賀野）、弥掛作り（川ノ内）、於児作り（黒石）、
孝作り（大正）、カンツクリ（十川）、牛ヶ作（戸川）、仁王作り（古城）

▽地

頭地（根元原）、小倉地（東川角）、権現地（東川角）、白皇地（窪川中津川）、中ノ地（日野地）、ウシ
地（影野）、小奈良地（仁井田）、麻斗地（与津地）、幸地（与津地）、新吾地（与津地）、飛多地（与津
地）、孫四郎地（与津地）、松尾地（与津地）、備後地（奈路）、東地（道徳）、松尾地（興津）、元地（興
津）、平野地（下道）、文藏地（大道）、百人地（十川）

（人名地でない他の地）

五反地（神ノ西）、六反地（神ノ西）、陰ノ地（若井川）、五反地（若井川）、五反地（金上野）、影地（見
付）、五反地（根々崎）、八反地（東川角）、八代地（宮内）、七反地（大井野）、両免地（大井野）、西
野地（寺野）、形ア地（南川口）、影地（野地）、五代地（米奥）、宮ノ地（替坂本）、松ノ下モ地（平串）、
西野地（黒石）、三代地（数神）、下モ地（奈路）、廻り地（道徳）、西野地（平野）、六代地（打井川）、
十九代地（市ノ又）、奈路地（芳川）、ダバ地（下道）、下ノ地（地吉）、宮地（井崎）

五 作物型

▽芋・豆・粟・黍・ソバ

キビジリ（峰ノ上）、アハガサコ（中村）、ヒエノ谷（窪川中津川）、小豆谷（床鍋）、円豆端（黒石）、

豆代（藤ノ川）、キビジリ（希ノ川）、豆ヶ谷（打井川）、ソバビ（昭和）、イモヂ（大道）、豆尻（地吉）、小豆谷（広瀬）

▽イラ・イラクサ・藤・葛

稻作の少ない山地では、藁を手に入れるのに苦労した。逆に山地の繊維材料を採取し工夫した。

イラガサコ（井崎）

六 「焼畑民俗文化論」以外の焼畑地名

▽カノウ・カンノウ・カノ・カン

『地名の歴史学』（服部英雄著）に焼畑地名としてカノウ地名の分布を示している。

ドウカン（窪川）、叶田（東川角）、トウカノ（寺野）、トウカノ続山（寺野）、官立（窪川中津川）、カ
ン立山（窪川中津川）、官ノ屋式（魚ノ川）、カンジキ（下津井）、カノヲギ（大道）、カンドヲ（大道）、
カンツクリ（十川）、カンダ（井崎）

※「官立」は、神立の転訛で神社所在地かもしれない。

▽サシ・サス

サシは焼畑を意味する古語。関東にはサスという地名が非常に多い。サスは焼畑地名

石サシ本田（数神）、石サシタ（市ノ又）、佐助谷（茅吹手）※サスケ谷が転訛して佐助谷か

▽キリ・切

大切（東大奈路）、南ノ切（根元原）、大切（根々崎）、大切（川ノ内）、久保切（窪川中津川）、ヌケ切
山（窪川中津川）、窪切（日野地）、源八切（上秋丸）、下タ切（仁井田）、上切（平串）、三反切（与津
地）、耳切山（八千数）、キリノ木サコ（打井川）、太郎兵衛切り（下津井）、釣切山（戸川）、堀切山（戸
川）、ヒツキリ（古城）

▽コウゲ

「コウゲ」とは、四国の愛媛から中国地方に広く使われる語彙。多くは短い草の生えた土地で、水田
はもとより畑にも開き難い所。それ故にしばしば芝の字が宛てられている（『総合日本民俗語彙2』536
頁）。一般に高原の草地の水流に乏しい所。芝、高下、広原などの地名。カゲに同じ（『民俗地名語彙
辞典』上、345頁）。

打井川のコウゲダバは芝草地というより焼畑地であると推理する。

コウゲダバ（打井川）

▽クビ・ビヤクビ・官首・クビタ →詳しくは「ミヤクビ」

本間雅彦著「牛のきた道」では「ビワクビ・ミヤクビ」の地名が高知県に広く分布していると指摘。

ビヤは牛の古語、クビは焼畑の跡「クビタ」の転訛したもの。アイヌ語も焼畑は（切替畑）の語がク
ビタ。

宮クビ（大正）、ミヤクビ（弘瀬）、宮首（浦越）、宮クビ（昭和）

※ホノギでヒワクヒ（南川口）

焼畑地名は、炭焼きに関連する地名にも通じるし、
タタラ製鉄の金属地名にも通じていると思える。こ
れら字名は、四万十町内の焼畑地名として機械的に
拾っただけのことである。これから現地踏査と地
理情報システム（G I S）による解析分布により精
度を高めて第2弾としたい。
(武内)



4、災害地名考¹⁸⁾

(1) はじめに

高知県四万十市川登に「塩塚峠」¹⁹⁾という地名があり、「昔は近くまで潮が入ってきていた」という伝承がある。「塩」の地名に由来するものと推測されるが、塩塚峠の標高は最大で450メートル、四万十川河口からは15メートルもある。はたして潮が入ってきたという話は本当だろうか。地殻変動は数千年前であり、そのときに地名があったとは思えない。漢字は「潮」の字ではなく、地元の人は「シユウツカトウゲ」と呼んでいることなど、いくつか疑問点が浮かぶ。伝承や意味だけでは根拠が不十分で、「塩塚」が土砂災害や水害、地震、津波などと関係のある「災害地名」と断定することは難しいと言えよう。

地名は長期にわたって使用され続け、発音や音便、意味の変化が起きるため、その語源や意味の解釈は非常に難しいことが指摘されている（服部編 2004）。その地名を語源の考証にとどまらず、「住民の生活史を明らかにする資料」として捉えたのは柳田國男である（柳田 1936）。特に、80年代以降には、言語人類学（和田・崎山編 1984）・認識人類学（合田編 1982）の影響を受けて、地名は村という共同体の地形や土地への環境利用・環境認識の在り方に強く影響を受けていることが指摘されるようになった（浅野 1984・福田 1989・関戸 2000ほか）。

地名の中には、災害と関わりのある地形や土地を意識、認識して命名されたものもあり、災害記録や伝承と複合させて検証していくことで、災害地名としての性格を指摘できるものもある。本稿では、地名を古代・中世以来、村の人達が生活の中で使い続けてきた歴史的資料と考え、景観復元の手法などを使いながら、災害と開発の視点で検証してみたい。

(2) 研究史と問題の所在—災害地名を読み解く—

2011年3月11日の東日本大震災を受け、災害地名に関する著作が相次いで出版されている（楠原 2011、ダイヤモンド社 2011、後藤ほか 2012、小川 2012、滝澤編 2012など）。地名学や建築、土木、地震学など分野も多岐にわたり、再版を重ねている著作もあり、国民の地名への関心が高まっていると言えよう。

地名と災害の関わりについては、地名学者の谷川健一氏（1985）らも指摘してきたが、同時期から建設省（現国土交通省）の土木技術者として積極的に提言を行ってきたのは小川豊氏である（小川 1983、1986、1987、1992、1995、1996）。土木技術者として現場を歩いた経験などから、「先祖が土砂災害などから逃れる術として、子孫にその情報をある種の地名に込めて伝えた」と考察。地名に込められた災害の記憶を解釈し、「土地の履歴書」として「災害予知」や「防災の知恵」に活用する必要性を説き続けてきた。

小川氏は複数の古語辞典を使い、数々ある地名の意味から災害に関わるものを抽出し、災害地名の可能性を指摘する。近くにある土砂災害発生地、危険地域、断層などの存在をセットにして説を補強していく手法を取るが、議論が全国規模かつ広範になるに従って、地名の辞書的な意味の解釈が先行してしまい、実地調査も不十分になっている印象を受ける。

例えば、『あぶない地名』（小川 2012）の「スク・スグ」については、「剥く、鋤く、から削ったり剥いだりする意転じて①地すべり崩壊地②川崖になるような谷地形（例）高知県宿毛市和田ほか ワダ（曲）」とするが、現地での「宿毛（スクモ）」の解釈は、「今から、三、四千年前、松田川河口に形成される宿毛の中心地は、遠浅の海でした。そのため、満潮になると海水が押し寄せて来る程の大湿原で、一面に葦が生い茂っていたといいます。古代の人々は、和歌等にも詠まれているように、枯れた葦のことを“すく

¹⁸⁾ 楠瀬慶太 2013 「高知県の地名に見る災害と開発の記憶」『土佐民俗』96号を一部改変して掲載した。

¹⁹⁾ 塩塚坂、塩塚山（標高450メートル）とも。峠道は、四万十市の中心部と愛媛方面をつなぐ県道宇和島一中村線（現在は国道441号）の難所だったが、1974年に塩塚トンネル（212メートル）が開通。「戦国期には、土佐一條氏に仕えた舗地（式地）民部藤康が守る「塩塚城」という城があり、伊予の軍勢の軍勢に取り囲まれ落城した」という伝承を柳田國男が記録している（柳田 1989）。

も』と言、宿毛の名前の由来はここからきていると言われています」(宿毛市ホームページ)とされており、地元の伝承にそぐわない解釈となっている。また、小川氏が根拠とする活断層や土砂災害危険地域、津波被害地域などは全国各地至る所にあり、いかなる地名も災害と結び付けることができるという方法論的な矛盾点も抱えている。

ただし、小川氏の土木分野からの問題提起の意味は大きく、現在では土砂災害危険箇所MAPから小地名を抽出・分析し、災害地名や災害危険箇所を探る研究(柴田ほか2008)や、地盤特性と災害地名を重ね合わせて、その関係性を分析する研究(河合ほか2009)など防災分野のより細密で科学的な手法による分析も進んでいる。また、防災の手引書などにも「地名と災害」の項目が立てられるなど、行政、NPO法人などの実践分野でも周知が図られている(宮崎県土木部2006、NPO法人自然災害・地域防災対策支援センター2009)。

一方、地名研究家として地名の語源などの研究を行ってきた楠原佑介氏は、地名の語源や意味から災害地名を抽出して、災害の危険性などを訴えている(楠原2011)。しかし、著者名の間違い²⁰⁾や地名の誤読も多く、参考文献も論文にあたらず新書を引用するなど、実証研究としてはほとんど成立していないと言える。例えば、東北地方沿岸の「潮腰」「女川」「小名浜」「気仙」などの地名の意味をアイヌ語起源説などから解釈し、津波痕跡地名と推定。地名が「東日本大震災津波を予測していた」としているが、地名は全て海外線の地名で、これまでの歴史地震の記録からも津波が来ていた場所であり、わざわざ予測していたとする指摘は的外れのように感じる。

また、南海地震の津波にも触れ、高知市の浦戸湾周辺にある地名「吸江(ぎゅうこう)」について、「考えられる由来は、津波の引き潮が発生、割れ目に吸い込まれるように見えた」ことから付いたと推測する。しかし、現地の言い伝えでは「鎌倉時代、夢窓疎石が土佐へ隠棲し、若手の指導育成のための学問所として建てた吸江寺に由来。眼前に広がる浦戸湾を禅の公案『吸尽す長江の水』に例えたことから付いた」とされていることについては全く触れられていない。さらに「吸江」の読みを本文中では「きゅうこう」としており、現地の踏査や文献調査などを行っていないことは明白である。災害地名の認定については、全体を通して推論の域を出ず、実証的な研究とは言えない。

これまで見てきたように、小川、楠原両氏の研究は、実証的な検証を経ないまま、いくつもある地名の意味から恣意的に災害に関わるものを抽出し、危険箇所だと解釈している。地名は彼らが言う「災害の履歴書」としてだけでなく、さまざまな要素を含んだ「土地の履歴書」としての性格を持っている。つまり、問題点は諸説ある意味や由来から地名を解釈・議論するため、結局は明確な根拠がなく推測の域を出ないという「地名(語彙)研究」の限界を克服できていない点にある。

そこで本稿では、地名の意味にこだわるのでなく、防災分野の研究者らが行ったように、災害地名と推測される地名の立地する地形を分析。災害記録や伝承と複合させて、災害地名として認定できるかどうかを検討する。また、古文書や災害記録に記載された地名を現地比定。災害の実態や当時の景観を文献と地名から復元し、防災に活用する方法を探ることで、地名研究の限界を克服する方法論を提示する。

(3) 災害地名を歩く

すでに服部氏などが指摘しているように、「ホノギ」「しこ名」「小字」といった小地名を見ていくと、漢字は宛字である場合が多い。つまり、漢字から地名の意味を理解することは危険である。それは、古文書・古記録などで地名表記の変遷を見ていくと分かる。例えば、高知県香美市の地名では、「カラ谷(戦国期)→空谷(明治期)→唐谷(現代)」「マツダキ(戦国期)→松竹(江戸)→松滝(現代)」というように、時代によって漢字が異なっている。以後、地名表記はできるかぎりカタカナで表記する。

²⁰⁾ 例えば、災害地名とする根拠として、地震学者の松田時彦氏の『活断層』(岩波新書、1955年)を引用しているが、本文中では「松田時雄」と間違って引用している。

ここでは、四国山地に面した山村である高知県旧物部村²¹⁾（現香美市物部町）の土砂災害に関わる地名について見てみようと思う²²⁾。この地域では、住民が同じ急傾斜地でも形状によって「タキ（ダキ）」「ツエ」「タビ」と地名語彙を使い分けていることが分かっている（楠瀬 2008）。

旧物部村の山中には崖崩れがおきて、岩肌がむき出しになっている場所が多いこのような断崖は「ダキ」と呼ばれ、水が流れず、かつ、あまり近寄ってはいけない良くない場所として認識されている。大字別府の「瀬次郎ダキ」（写真1）、大字安丸の「白滝（シラタキ）」「神滝（コウダキ）」などあるが、いずれも集落からは外れた場所にある地名である。

一方、「ツエ」とは新しくできた崩壊地のことをいう。近世初期の『長宗我部地検帳』（以下『地検帳』）のツエノ村（現在の大字頓定の内）に検地地として検出された「杖谷」や、大字笠の「潰野々川」、大字市宇の「ツエ谷」、大字久保上久保の「コウダイラのツエ」（写真2）、江戸期の大規模な土砂崩れ（大ヅエ）で集落全体が消滅した大字高井の「冬谷」の周辺にある「ツエ」など、谷川の地名に多い。谷川が大規模な洪水で「ハケ」でできた地形につけられることが多い地名である。

また、この地域では、水の流れる滝（瀧壺）のことを「タビ」と呼び、滝の下が深くなっているものは「お釜」と呼ぶ。大字別府の「百間タビ」のほか、「タビノロ」という地名が大字五王堂・中谷川・大柄にある。

このように、中山間地域で土砂災害の危険性も高い旧物部村の住民は、大雨でよく土砂崩れを起こす「タニ（谷）」、小規模な谷地形の「サコ」だけでなく、地形によって災害地名を呼び分けていることが分かる。山村特有の地名語彙について集めた『山村分類語彙』（柳田國男著）など辞書類を参考にするのも良いが、地名語彙は地域差も非常に大きい。実際に現地に行って住民から地名を聞き、伝承や地形を確かめ、語彙の使い分けを確認すれば、災害地名の認定も容易になる。ただし、その地域で災害地名として使われているからと言って、他の地域で同様に使われているとは限らない。地名が所在する現地で聞き取りと現地踏査を行うことが重要である。



写真1 瀬次郎ダキ（大字別府野地より）



写真2 コウダイラのツエ（大字久保上久保）

（4）地名から津波浸水域を調べる

次に、記録に残るだけで、白鳳、仁和、康和、正平、明応、慶長、宝永、安政、昭和の過去9回、高知県を襲っている南海地震と海岸線を襲った津波について考えてみたい。調査地域としては、太平洋に面し、津波の危険性が指摘されている幡多郡黒潮町を選んだ。同町は、2012年3月31日に国の内閣府有識者会議が公表した南海トラフ巨大地震の新想定で、地震に伴い日本最大の34.4メートルの津波が沿岸部を襲うと想定されている。これは、過去の歴史地震では宝永期の南海大地震に匹敵するものだと推測されている。

²¹⁾ 旧物部村は、1953年町村合併促進法の施行にともない、旧上野生村と旧楨山村が合併して、1956年に誕生した自治体である。その後、2007年に旧物部村・旧香北町・旧土佐山田町が合併し、香美市となった。

²²⁾ 地名や伝承、その使い方などについては、2007年夏に香美市域で行った聞き取り調査の成果を参照（楠瀬慶太 2008）。

ここでは、同町の中部に位置する上川口集落を取り上げてみたい。同集落は、U字形の湾の奥に位置し、1946年12月21日の「昭和の南海大地震」では、河口部の船倉川の石垣が崩れ、家屋2棟が倒壊。1人が死亡している。また、海上保安庁水路部（現海洋情報局）が地震直後に行った調査では、最高だった須崎市野見の5.2メートルに続き、2番目の4メートルの浸水²³⁾があつたことが記録されている（大方町史改訂編纂委員会1994）。また、2010年2月27日のチリ津波でも、1メートルの津波高を記録するなど、立て続けに津波に襲われた地域である。集落は漁業を営んでいた浦分と農業を中心の郷分に分かれている。

上川口には、1854年の安政地震²⁴⁾の記録『大汐筆記』（安光平氏所蔵、写真3）が残されている。『大汐筆記』は上川口に住む漢学者・安光南里が地震直後の自らの体験を書いた回想録である。ここでは、上川口や黒潮町の海岸線が亡所となつたことが記されている。また、津波に襲われた場所の地名「糀屋（コウジヤ）」「大磐（オオハエ）」「高磐（タカハエ）」「城山」「御藏」「夷堂（エビストドウ）」「三角畠」「三軒屋」「木瀬カ市」「窪の前」「間ノ鼻」「徳田屋」「国沢」、「下マエ」（浮津）「岩崎」（入野）といった地名が記載されている。

安政の津波を復元し、今後の集落の防災に活用してもらおうと、2012年11月、地元の古老らとともに、『大汐筆記』記載の地名を現地比定し、現地を歩くワークショップを実施した²⁵⁾（写真4）。

『大汐筆記』では、1852年11月5日午後4時ごろ、「ゴトゴトゴト地震ユリ出ス。（中略）其メリメリバリバリト云音ノ外ヅルンヅルンヅルヅルヅルトイフ音天地ニ響キ渡リ其声ノ大ナル事タトヘンカタナシ。浦ノ家ノ方ヲ見レハ家バタバタバタバタ倒レ、土煤カヤナトノ宙ヘ飛チルアリサマ…」などと地震発生時の様子を、擬音語を使い詳細に記している。そしてしばらくすると津波が来る。「余又下ヘヨリ海ノ方ヲ見レハ海ハクレ上リ大磐ノ岡ノ浜ヲツブツブト汐コエ来リ白キ阿波タチテグワグワクト川ノ中ヘサシ込ム。汐サキ家ノ下ノ水汲場マデ来ル。扱塩ハ殊外早キ也。（中略）兎ヤ角スル内、早汐ハ来ルベシト城山ト云高キ処へ上リテ見レハ一番ノ塩ドットサン込来ル。（中略）一番ノ塩ハ強テ高カラス早引トル様子ナレハ扱ハ我宅モ流亡ハ免レタラント少シハ喜ヒタル内二番ノ塩サシ来ル。三番四番次第々々ニ塩大ニナリ、四番アタリノ塩ハ其干落ル事甚シク、大ハヘヨリ通リ間ノ鼻マテ一切干潟トナリコレ迄目モフレザル底バヘ尽ク露レ出モノサスマシキ事タトヘン方ナシ（後略）」などと記し、5、6回津波が押し寄せた（12回来たという人もいた）としている。

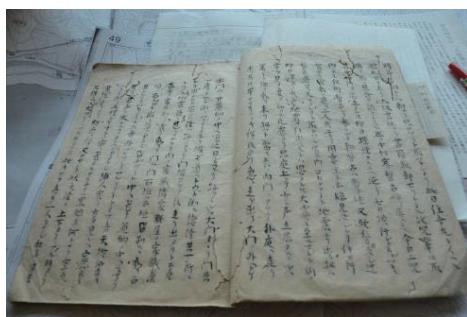


写真3 『大汐筆記』(原本)



写真4 ワークショップの様子

²³⁾ 須崎市安和、旧佐賀町、旧大方町上川口、室戸市椎名でも四メートルを記録している。

²⁴⁾ 854（嘉永7）年の「安政南海地震」は、「安政東海地震」の32時間後に発後に発生。両方の死者は約3万人との説があり、土佐では全壊3082戸、流失3202戸、焼失2481戸、死者372人の被害が出た。幡多で揺れが大きく、四万十市中村、右山で震度七。宿毛市、黒潮町浮鞭、土佐清水市三崎、大月町柏島、土佐市宇佐町、四万十町興津で6強。須崎市押岡、中土佐町上ノ加江、四万十町志和で6弱。高知城下は6強で、大火が発生。津波はおおむね宝永地震の半分程度。高知市付近は1~1.2メートルの地盤沈下。前日に起きた東海地震も、県内に震度4、1メートル程度の津波をもたらしたとされる。

²⁵⁾ 小地名の比定から過去の災害崩壊地を復元した研究として、平野昌繁氏の「吉野郡水災誌小字地名にもとづく1889（明治22）年十津川災害崩壊地の比定」『京都大学防災研究所年報』30B-1、1987年などがある。

また、上川口で15~16軒の家が流れたこと
 ▽宝永の津波は御蔵の下の道まで上がってき
 たが、今回は2段くらい下の田んぼまでだつ
 たこと▽宝永の津波は三角畠の下まで上がつ
 てきたが、今回の津波では少し下の源亟家
 下の門口までだったこと▽宝永の津波では、
 川は蟻川の「三軒屋」まで上がってきたが、
 今回は「木瀬カ市」の田までだったこと▽
 今回の津波は宝永より90~120cm低かった
 こと▽伊田浦は壊滅、浮津下マエは部分流
 出が多く、全壊は少なかったが、10軒あまり
 が流されたこと▽入野浦は残らず流出。
 田ノ口集落も流出したこと一などが書かれ
 ている。

地名の現地比定から安政の津波浸水域を復元したのが、図2、図3である。津波は「高磐」を超えて蟻川を遡上。「木瀬カ市」まで達した。また宝永の津波では、「三軒屋」まで達している²⁶⁾。津波により、浦分のほとんどの家が流出。高台にある「御蔵」の下まで来たと考えられる。また、安光安里の住む「庄屋跡」の屋敷も海に流出した。

また、『地検帳』で近世初期の上川口村の村落景観を復元したのが、図4である。すると、中世期には浜側（浦分）に集落はなく、丘部（郷分）を中心に集落が立地していることが分かる。集落は、国の新想定の浸水域からもほぼ外れる高台にあり、高波や津波の被害を避けられる場所に立地していた。すなわち、



図2 『大潮筆記』による安政・宝永津波の浸水域復元
 (上川口 (上))

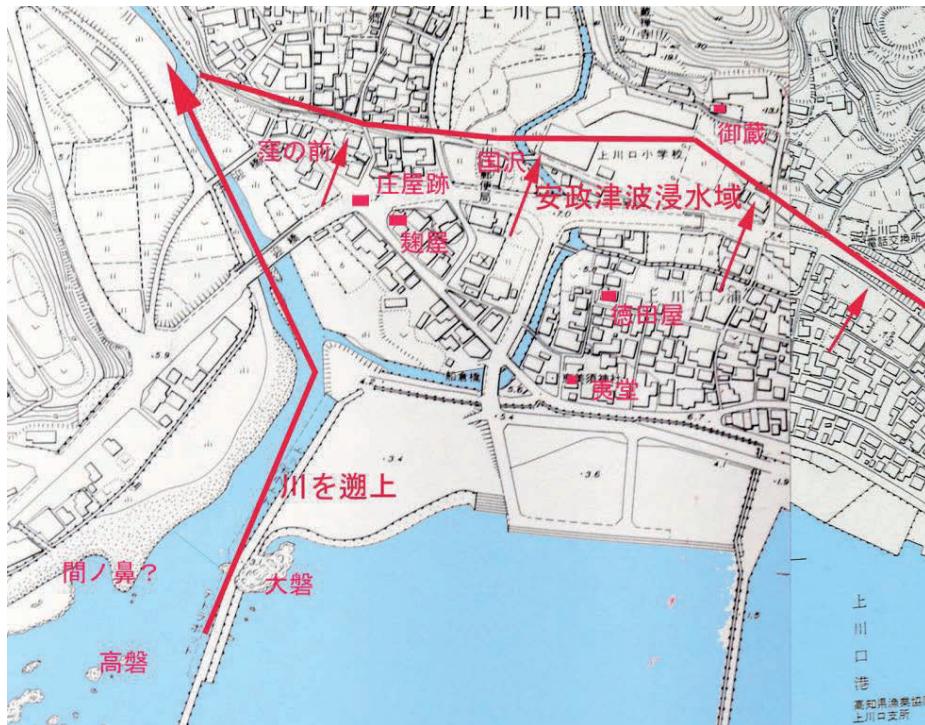


図3 『大潮筆記』から復元した安政津波の浸水域 (上川口 (下))

²⁶⁾ 「三軒屋」まで達したという宝永の津波の川の遡上は、県が発表した新想定の浸水域とも合致する。

災害のリスクの高い浦分への集落開発は近世以降であり、津波の規模も大きかったとされる1605年の慶長の南海大地震では、浸水などの被害をほとんど受けなかつた可能性が高い。

このように古記録に書かれた小地名を現地比定し、読み解くことで、災害の状況や災害への住民の備えが確認できた。ここでも、現地での聞き取りと現地踏査によって、多くの防災のヒントが得られることが分かつた。地名の意味を考えるだけでなく、土地や住民に根ざして地名を解釈することが重要である。

(5) 地名や集落から災害を考える

ここまで見てきたように、地名自体は時間軸を持たないため、いつどこでどういう意味を込めて設定されたかを確定することは難しい。しかし、その意味を語源からとらえるだけでなく、地形や立地、文献などから解釈すれば、災害地名としての性格や開発と災害との関係などを理解することができる。また、地名から人口増に伴う生産力拡大のため、村落が災害のリスクの伴う環境不適地へ開発を進めていく過程や、災害回避の知恵も復元できる。すなわち、複合的な資料によって地名を解釈する方法論が、地名の正しい解釈やその活用法として有効であることを示すことができたのではないか。

さて、2011年の東日本大震災では海岸部の多くの集落が津波により消滅した。また、福島第一原子力発電所事故により、福島県では避難により人が住まなくなつた集落も生まれた。消滅や移住にともない、集落や地域のコミュニティが失われているという指摘（山田 2012）はあるが、過去から続いてきた集落そのものを考える議論はほとんど聞かない。

江戸期の文献などで津波により何度も「亡所」となつた場所に、人は住んできた。行政などによって「高台移転」の必要性が叫ばれているが、これは集落自体の意味や長年続いてきた暮らしや営みをリセットするものであるということをまず認識してもらいたい。先祖代々その土地に暮らしてきた住民には、移転という決断は簡単なことではない。つまり、集落の成り立ちやその開発過程について住民自身が問い合わせてみると必要がある。その際、集落に語り継がれ残ってきた地名が、災害との関わりや対応を考える重要な歴史資料となるのではないか。今回、黒潮町上川口で行ったワークショップもその一つである。地名や検地帳、地籍図、古地図などを元に集落の形成過程について、地域でワークショップを開き、考えてみてはどうだろうか。そこに、歴史学や民俗学の知識を持つ研究者や郷土史家がいれば、なお心強い。

最後に、土砂災害の発生地域である中山間地域や津波の被害を受ける海岸部の集落では、農林業や漁業といった村を支えてきた生業が廃れ、集落の急速な過疎高齢化によって「限界集落化」が進行している（楠瀬 2009）。このような中で、集落の小地名や災害伝承を知る古老が少なくなり、後代に伝承されないまま次々と失われていくという現象が起きている。災害地名が一般の関心を集めようになつたことは重要なことだが、一方でその正確性を保証する伝承や地名が消滅してしまつて忘れてしまつてはならない。

(楠瀬)

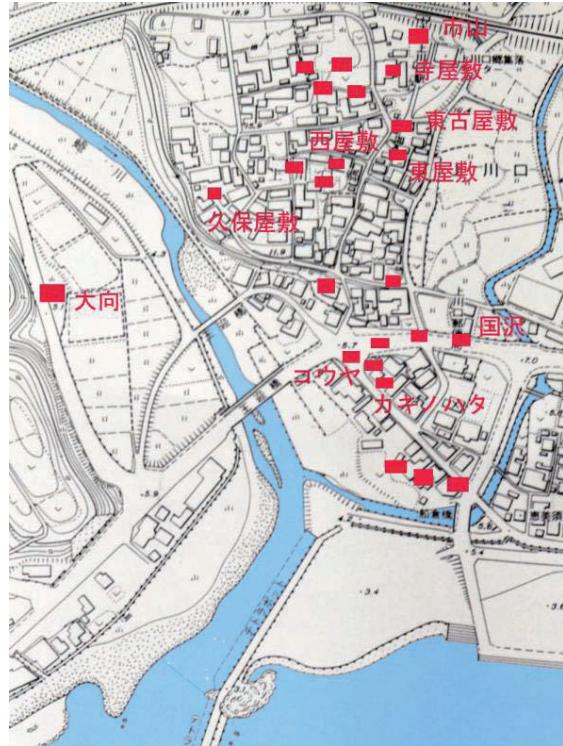


図4 『地検帳』から復元した近世初期の上川口村
(上川口 (上))

【参考文献】

- 合田濤編 1982 『現代の文化人類学① 認識人類学』至文堂
- 浅野久枝 1984 「東京都三宅島における地形を主とした民俗分類体系」『地理学評論』五七
- 浦野正樹・大矢根淳・吉川忠寛編 2007 『復興コミュニティ論』弘文館
- N P O 法人自然災害・地域防災対策支援センター2009 『災害からあなた自身を守るために（地震編）知つておきたい暮らしと災害シリーズ』
- 小川豊 1983 『危険地帯がわかる地名』山海堂
- 小川豊 1986 『語り継がれる危険予知』山海堂
- 小川豊 1987 『知っておきたい災害と植物地名』山海堂
- 小川豊 1992 『宅地災害と地名』山海堂
- 小川豊 1995 『崩壊地名』山海堂
- 小川豊 1996 『災害予知と防災の知恵』山海堂
- 小川豊 2012 『あぶない地名—災害地名ハンドブック』三一書房
- 河合真梨子・福和伸夫・護雅史・飛田潤 2009 「地震ハザードの説明力向上のための地名活用に関する研究」『日本建築学会構造系論文集』第74卷第636号
- 楠瀬慶太 2008 『新葦生・槇山風土記』花書院
- 楠瀬慶太 2009 「限界集落化の歴史的プロセスに見る山村の未来」『季刊・政策経営研究』2009vol.1
- 楠原佑介 2011 『この地名が危ない』幻冬舎新書
- 大方町史改訂編纂委員会 1994 『大方町史』
- 後藤健介・後藤恵之輔 2012 「土砂災害・液状化の発生と地名由来」『自然災害研究協議会西部地区会報：研究論文集』36
- 柴田久・石橋和也・村橋里美 2008 「防災まちづくりに向けた古地名呼称の活用可能性に関する基礎的研究」『土木計画学研究・講演集』
- 関戸明子 1988 「地名研究の視点とその系譜」『歴史地理学』140
- 関戸明子 2000 『村落社会の空間構成と地域変容』大明堂
- ダイヤモンド社 2011 「古地図・地名でわかる危険地帯」『週刊ダイヤモンド』99
- 滝澤主税編 2012 『長野県の活断層と災害地名』長野県地名研究所
- 谷川健一 1985 『地名と風土』三省堂
- 服部英雄 2000 『地名の歴史学』角川書店
- 服部英雄編 2004 『別冊歴史読本八一 地名を歩く』新人物往来社
- 福田珠己 1989 「四国山地旧焼畑村落における環境区分」『人文地理』41—4
- 宮崎県土木部 2006 『宮崎県における災害文化の伝承』
- 柳田國男 1936 『地名の研究』
- 柳田國男 1989 「木思石語」『柳田國男全集5』筑摩書房
- 山田晴義 2012 「東日本大震災の被災地におけるコミュニティ再生に向けての課題」N P O 法人ローカル・グランドデザイン (<http://www.npolgd.org/>)
- 横川末吉 1961 『長宗我部地検帳の研究』市民叢書15
- 和田佑一・崎山理編 1984 『現代の人類学③ 言語人類学』至文堂